
久留米・ラブ・ストーリー

Tomiono

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

久留米・ラブ・ストーリー

【Nコード】

N6957E

【作者名】

Tomionno

【あらすじ】

俺はとある寺の住職の一人息子、漆山京介だ。身長百六十八センチ、体重五十五キロ。西久留米市立南部中学校の中学三年生だ。文系はダメ、理系もダメ。芸術にいたっては無能だ。しかし、異様なほど喧嘩が強い。そんな俺は、この中学校で最後の年を迎えることになり、さまざまなことに巻き込まれていく……………。

第一話 四月（前書き）

この物語はフィクションです（当たり前だ）。

第一話 四月

春であつた。桜は入学式を過ぎ、少しずつだが葉桜になりかけている。長い春休みを終え、俺が通う西久留米市立南部中学校も、だんだんと活気付いてくる。校庭を縁取るように並ぶ木々も、春の暖かさに歓喜しているようであつた。

そんなさなか、俺は自分の部屋でゆっくりと起きた。窓の外を見ると、まだ少し早いぐらいの時間であつた。今日は学校の初日。遅刻だけはしちやいけない。俺は自分の部屋の布団を片付け、居間へとつながる長い長い廊下を歩いた。

俺の家は寺だ。俺の親父は住職。それでこの近所には迷惑だが俺も知れ渡つてゐる。お袋は俺が小さい頃病氣にかかつてもういない。だから、いつも炊事は寺に住み込みで修行をしている坊さんがやっているのだ。朝ごはんとかも、坊さんたちがついでに作つてゐる。

居間に着くと、親父がいつものように頭を光らせ、俺を睨んで味噌汁片手に低い声で言つた。

「京介・・・・・・・・お前、遅刻なんぞしたらどうなるかわかつているんだろうな」

俺は、別に俺が何時に起きようが文句を言われることはわかつているので、適当に流した。

「わーっ たよ、遅刻なんかしないから」

「特にお前・・・・・・・・去年は喧嘩がひどかつたな。あまりこの漆山家に泥を塗るようなことをしたら、地方の寺に出家させるからな」

俺は思った。ここ久留米だって充分地方だと思ふのだが。いくら九州第八の都市であっても。

俺は朝ごはんを食べ終え、部屋からかばんを取つた。そして、制服に着替えた。何のことない、変哲のない制服だ。白い襟シャツに黒いズボン。俺は玄関に行き、靴を履き、勢いよく外に飛び出した。すると、俺の後ろから親父が叫んで叱つた。

「京介！ 挨拶はちゃんとしろといつも言っているだろうが！」

俺は振り返って叫んだ。

「わかりました！ 行ってきます！」

俺は毎日をいつもこんな風にはじめている。俺の名前は漆山京介。九月三日生まれ。身長は百六十八センチ。体重、五十五キロ。喧嘩は高校生にだって余裕で勝てる、やんちゃで不良な寺の住職の一人息子、という風に知られている。学校では、体育はいつも『5』だが他の教科は普通以下だ。特に美術や音楽、そして数学などはチンブンカンブン。昔からこのあたりに住んでいる。

寺の門を出ると、門の外には見慣れた女子がいた。

「また叱られてたね、京くん」

この女子は、瀬戸美奈子。俺の幼馴染だ。三月二十日生まれ。身長は百五十センチ。体重は、ばらしたら俺の命はないだろう。目はくりつとしていて、長めの黒い髪は頭の左右で結んである。ツインテールだ。基本的に人を信じて疑わない性格。頭はよく、美術や音楽でもいつも高得点をとっている。しかし、親が芸術に無関心なので才能を伸ばす努力はしていないようだ。親は紡績工場の工場長である。その反面、運動は得意じゃない、俺と正反対の人間とも言えるだろう。それにしても、この歳にもなつて『京くん』はやめてほしい。

美奈子は昔から知っている。他の人から見れば割と可愛く、また運動音痴なので、よくからかわれたり、狙われたり、いじめられたりしていた。俺はそういうのを許せない質なんで、よく割って入って喧嘩してたりしてた。その所為で喧嘩が強くなったのかもしれない。考えてみれば、俺の喧嘩はほとんど美奈子がらみかもしれない。美奈子もそれに対して恩を感じているのか、学校でも俺の立場が悪くなるとかばってくれたり、俺が生徒会長にいびられたりすると助けてくれたりしてる。ありがたい奴だ。しかも、小さい頃から知ってるからいろんな約束をしてしまった。まあ、ほとんどが時効だな。お嫁さんになるだとか、ずっと一緒にいたいだとか。高校生

にもなりや変わるだろ。同じ高校に行こうね、というものがあつた。すこし前のことだ。

俺たち二人は通学路を歩いた。俺は少し周りの目を気遣い、歩幅を少しずらしながら歩いた。仲良しではあるが冷やかされるのはごめんだ。

生徒たちが通う通学路は、小川が組み合わさって大河になるように、やがて一つの大きな通学路になった。生徒たちの数も格段に増えた。そして、校門が見えてきた。

「ん？　なんだあれは？」

と、俺は校門の前の人ばかりを見て言った。

校門では先生たちも門の前に並んでいるが、誰も校舎おろか校庭にさえ入っていない。よく見ると門が固く閉まつてる。それで生徒たちがたくさん校門の前に集まつていたのだ。俺と同学年の三年生の奴らは特別におどおどしてキョロキョロしていた。今まで二年生だった奴らが、急に下級生を、学校を引つ張つていけないといけない立場の三年生になったんだからな。もともと、俺は三年生だが、そんな引つ張るとか面倒くさいことはしないがな。

美奈子は俺を見て言った。

「京くんも、やっぱり三年生になるんでときどきする？」

他の人なら、俺は「ハア？」と睨み、聞き返すところだが、何せ美奈子だ。恩があるのにそんな無礼なまねはできない。

「いや、別に……」

美奈子は続けた。

「中学校が終わったら高校だね。京くんはこの高校を受験するの？」

俺は驚いた。

「お前、まだあのことを覚えていたのか！」

美奈子は言った。

「当たり前でしょ。京くんはどの高校を受験するの？」

まあ、確かに俺にとっちゃあの親父で高校を受験しなかったら親

父に理由つけられて出家させられるのがオチだろう。偏差値も下がつていて高校は選べるどころではなかった。言ったように、俺は勉強は不得意だ。

急に、人ごみの中から手が伸びて、俺の肩を軽く叩いた。

振り向くと、そこには柏葉がいた。

柏葉光。七月七日生まれで、身長百六十七センチ。名実とともにこの学校で一番もてるやつだ。すらっとした体型で、目はぱっちりして、眉毛もくっきりしている。髪の毛は自然と茶色がかかっている。紳士的な性格。また、頭はよく、運動もこのあたりじゃ俺に次ぐ運動神経を持っている。しかし、家事が忙しいため部活には所属していない。二人の妹がいて、親は二人とも工場で遅くまで働いているため、基本的な家事は全部柏葉がやっているらしい。優しく、よく気づき、気さくでよく話す。いつも社交的で乗り気。それであって努力家で礼儀正しいのだから、もう弱点なしだ。ほぼ完全無欠である。

ちなみに柏葉は、バレンタインデーの度にチョコレート地獄に困っている。机の中も下駄箱の中にもチョコがぎっしり詰まっていて、登下校中にもたくさんもらう。いつもあんなにたくさんのチョコレートをどうやって処分しているのだろう、と思ってしまう。

そんな柏葉は、俺の良き友であり、良き相談相手でもある。幼馴染で、昔からずっと遊んでいた。多分美奈子と出会っ前よりももっと遊んでいただろう。

柏葉が俺に話しかけ始めると、急に柏葉の背後にデブが現れた。

そのデブは柏葉にこう叫びながら殴りかかった。

「柏葉あ！ よくもよくもよくもよくも！」

俺は思い出した。ああ、こいつは瀧澤寛一だ。二年生なのに先輩を先輩呼ばわりしないという図々しい奴。野球部に所属しているデブだ。こいつは去年、一年生だった頃、春休みの直前に告白し、そしてふられた。それだけならいいのだが、ふられた理由が、その女の子は熱烈な柏葉ファンだったから、というのだ。まあ、柏葉のフ

アンに告白するほうがおかしいが。そのため瀧澤は柏葉に対して恨みを持ち始め、春休みの間も家を訪ねたりして決闘を申し込んでいたが、柏葉は強いいため、一度も勝てなかったらしい。そりゃそうだ。あんなデブの拳が、軽快で俊敏な柏葉に当たるはずもない。

案の定、デブは何度も殴りかかったが、一分間ぐらいやっていて、一度もパンチを当てられずに力尽きて倒れた。柏葉は無駄な戦闘はしない主義なので、攻撃も数センチ動くだけでかわせるような見切り方をして、一度も反撃はしなかった。

瀧澤が倒れると、周りから歓声が巻き起こった。

「きゃー柏葉く〜ん！」

「素敵〜！」

柏葉は黄色い声には慣れているので、別になんともしないで俺に話しかけた。

「京介！ ついに俺らも三年生だな！ 何か、今年の目標とか立てたか？」

俺は眉をしかめた。

「目標ってなんだ？ そんなの立ててなんになるんだ？」

「いや、生活にメリハリがでるからさ」

「・・・別に思いつかないが」

柏葉は俺を近くに引き寄せて、小声で言った。

「京介、お前そろそろ瀬戸ちゃんに告白したりしないのか？」

俺は驚いてつい大声になった。

「ば、馬鹿言え！ 何で俺がそんなことを！」

柏葉はつまらなそうに言った。

「ならいいんだけど。お前顔赤くなってるぞ？」

「ば、バカやろう！ 急な質問で驚いただけだ！」

「でも、もしかしたらとられるかもしれないぞ？ 瀬戸ちゃんは割と可愛いし、少数ながら学校内にも彼女のファンはいるらしいし」

「馬鹿言え、俺は恩義は感じちゃいても・・・・・・恋焦がれちゃいない」

前にもこういうことは考えたことがある。幼馴染で、ずっとお互いの人生に付き合ってるから、はたから見れば仲良しカップルらしい。だが、俺はもう決めたのだ。美奈子は俺の幼馴染であって、恋人ではない。

柏葉が向こうに歩いて行くと、無数の柏葉ファンが人だかりをこじ開けた。まるで海を割るモーゼのように、柏葉が通る道は熱烈な柏葉ファンによってこじあけられた。そろそろ柏葉の人気は超人的になってきたと俺は感じた。

すると、今度は美奈子の友達がやってきた。軽くウェーブのかかった長く美しい黒髪は、学校内でも注目を集める。彼女は黒木佐和子。過去二年間での印象は、大人っぽい、落ち着いてる、とても頭がいい、そして面倒見がいい、という印象だった。女子の中でもわかりづらい。謎に包まれている。美奈子によると、父は林業の会社を構えていて、弟と妹を持つらしい。

黒木は俺の方を見て、言った。

「アンタ、今年の六月六日の運動会はちゃんと運動会に出るんじゃないかね」

そうだった。俺は去年、サボリたかった一心で、運動会を直前で抜け出してしまったのだ。俺を頼りにしていた赤組の奴らは絶望した（何せ反対側の白組には柏葉がいたから）。赤組はかつてないほど、こてんぱんにやられてしまったのだ。

俺は面倒くさそうに答えた。

「さあね……気が乗れば出るけど……」

美奈子はこれを聞いて、俺の目をじっと見た。

「京くん、六月の一番大事なイベントなんだから、ちゃんと出ないと！ 京くんは頼りにされてるんだから！」

俺は黙り込んだ。

黒木は、俺が返事しないのを見て、美奈子と会話を始めた。それはもうきしゃぴしゃぴした会話で、その女子の世界にはとても入れなかった。

「もう堪忍袋の尾が切れた！」

と、先生の誰かが言った。よく見ると、体育担当の桂谷であった。桂谷はさすが体育の教師だけある、というような超人的なジャンプ力で高い高い塀を飛び越し、内側から門を開けた。そして、生徒はみな、校庭の中へとなだれ込んだ。しかし、校舎はまだ開かない。鍵はなぜか校長先生は持つておらず、校長先生は先ほど鍵を持つている先生を迎えにいった。

突然、校門の前に高級車が止まった。みんながなんだろう、とざわめいていると、ドアが開いて、中から二人の男が出てきた。一人はおばさんのような顔をした白髪の背の高い男性だ。銀縁の細いめがねをしていて、きつそうな性格をしていた。校長の山門先生だ。

もう一人の男は、背は小さめの、色あせた和服を着た老人だった。反対側が見えないほど分厚いめがねをし、長い白髪は前で分け、後ろでポニーテールになっていた。なんともおかしな格好の先生だろう。この先生は草野先生だ。先生の中では最年長であり、学校創立以来から教えているという噂まで流れている。

桂谷先生とその他の先生は聞いた。

「草野先生！ 何でこんなに遅れてしまったんですか？ 授業が大幅に遅れてしまいましたよ！」

草野先生はふおっふおっふおっふおと笑い、答えた。

「いやいや、寝坊してしまっただけ」

先生たちはずっこけた。

草野先生は和服の中から鍵を取り出した。それを校長先生はもつて校舎の入り口まで走り、入り口を開けた。生徒は一気に流れ込んだ。

生徒が流れ込む中、校長先生は叫んでいた。

「ホームルームに荷物を置いたら、すぐに体育館に来るように！ 始業式をやります！」

生徒たちは、聞こえてるようで聞こえていないようだった。

俺の新しい教室は三年一組だ。三年生は一階、二年生は二階、そ

して一年生は三階の教室だ。このクラスは俺が知ってる奴らばかりだった。誰かの陰謀ではないかと思った。美奈子も柏葉もいた。ちなみに、柏葉と同じクラスだと知ったとたん、幸せのあまり気絶しそうな女子もいた。それを見て隣の教室でハンカチを噛んでいるジエラシー百パーの女子の群れがいた。ちなみに、去年は柏葉のクラスに異様に女子が少なかったため、よく他のクラスから女子生徒が授業を無視してやってきてたので、今年は柏葉のクラスに女子を出るだけ入れたそうだ。こっちの方が失敗なんじゃないかと俺は思った。

俺の教室は階段のそばにあるので、階段をひいふう急ぎながら言いながら上る下級生たちを俺は見ていた。

美奈子が後ろから話しかけた。

「人が苦労してるのにニヤニヤしてみると、感じ悪い先輩になっちゃうよ？」

俺は別にニヤニヤしているつもりは無かったが、していたのかもしれない。

更に柏葉も来た。

「よっ、お二人さん、早く体育館に行かないとどやされるぜ！」

俺たちはみんな、体育館に行った。

「全員、起立！」

と、影が薄い教頭先生が古いマイクで号令をかけた。

体育館に集まった全校生徒がだるそうに立ち上がった。

「全員、小さく前にならえーっ！」

全員が脇をしめ、手を前に出して距離を調整した。

「気をつけーっ、礼！」

全員が礼をした。

「着席！」

全員が座った。古いマイクを使い、いつもと同じ先生たちがいつもと同じ言葉を並べ、始業式は進んでいった。

途中で、背が同じぐらいなので横にいた柏葉が、また告白に失敗

した誰かの決闘を受けた。その男子は柏葉に殴りかかっていたが、例によって柏葉は戦わずして勝利し、その男子生徒は疲れ果てて倒れた。

そんな中でも平気で始業式を続けた先生たちや生徒たちは、いくらなんでもなれすぎだと思った。今年入った新入生以外はさすがに驚いていたが、その他の生徒や先生はみんななんともせずに淡々と始業式を続けた。

「これで、始業式を終わります・・・」

と、教頭先生が言くと、俺たち生徒はみんな立ち上がって、号令をもう一度繰り返した。そして、時間がかかったのでそのまま給食の時間に突入し、生徒たちはばらばらとそれぞれの給食へと散った。

ちなみに、ホームルームで班や席を決まるにあたって、激しい争奪戦となった。争奪の対象となったのは、柏葉と同じ班の席であった。だが先生は柏葉の班だけほとんど女子にするわけにもいかず、柏葉率いる生活班は柏葉、俺、綾野、細川、安浦、そして森屋だった。俺が柏葉と同じ班に入れられたのは、柏葉の希望だ。先生が他に男子一人生活班に一緒に入るとしたら誰がいいかと聞いたので、柏葉は一番仲がいい俺を選んだのだ。俺と柏葉以外の四人は女子であつた。

生活班は、教室の一番後ろの班だった。前の方に座ると女子がほぼ全員、柏葉の後頭部を見るだけで充実した一日を過ごすからだ。その女子たちは嫌われまいと家で必死に勉強して何とか成績をキープするだけに、もったいない。能力はあるのに、柏葉の魅力に囚われてばーっとしてしまうのだ。先生たちもこのことは、二年前、柏葉が一年生だったときから気づき、その対処法を心得ている。成績がトップの女子に、柏葉のサイン入り写真プロマイドがプレゼントされるという手法が編み出された。毎回違うのを配るため、試験時の女子の気迫と言ったらもうすごかった。女子の間ではコレクターも出始めて、インターネット上では全国的女子相手に高値で取引さ

れるらしい。柏葉はもはや一般人ではない。

しかし、この生活班は息苦しかった。四六時中、女子同士の、柏葉をかけた心理戦が行われていた。にらみ合い、脅し、嫌がらせ、全てが柏葉の見ていない一瞬一瞬で行われていた。そして、もちろん柏葉が見ているときは、女子は猫をかぶって『素晴らしい女性』を演出していた。

ただ一人、マシだったのが、綾野であった。綾野は間違いなく、誰が見たってわかるほどわかり易く柏葉にべた惚れだった。しかし、それを認めるのに苦労していた。素直じゃない性格だ。そのせいで柏葉に冷たくして、後で後悔している。他の女子はこんなにも素直にストリートに柏葉にアタックしている中、珍しいといえば珍しいタイプの女子だ。

まあ、他の班でもほとんどの女子の目線は柏葉に行っているがな。俺がもし柏葉だったらいやだと思う。学校に行けば女子の憧れのまなざしと、男子からの羨望・嫉妬の視線を常に感じるなんて。柏葉は慣れているのか、それが意外と鈍感なのかもしれない。

事件はそのとき起きた。給食を作る人たちは、今日は休みであったので、みんなに弁当を持ってくるように布令を出していたみんなの弁当はさまざまであった。家をあらわしているような気もする。

俺の弁当は健康食だった。玄米に無農薬野菜に油を使わず……・寺の食事であるがゆえに、みんなの派手なものとは違った。

みんなが弁当をわいわい食べていると、急に柏葉が俺に小声で言った。

「あちゃー、弁当忘れちゃったよ。ちょっと京介わけてくれないか？」

俺は別にいいぞと言った。俺はあまり動くほうでもない。腹もあまりすかないのだ。

柏葉のその声は、間違いなく小声だった。なのに、クラス中の女子が反応したのは何故だろう。突然クラスのほとんどの女子が立ち上がり、弁当片手に生活班へと駆け寄った。

「柏葉君、私の弁当食べて！」

「柏葉君、あたしの弁当全部あげる！」

「おさがりなさい！ 私の弁当なんか、ほら！ こんなに豪華な
よ！ 柏葉君食べて！」

もう女子の目には柏葉しか映っていなかった。

そのときだった。教室のドアが開き、一人の女子が入ってきた。
その女子はそれはもう可愛いかった。目はぱっちりとしていて、
髪の毛には茶色がかかっており、眉毛はくつきりしていて、唇は潤
いを見せていた。まだ新しい制服を着ていた。ほぼ全員の男子の口
があんぐり開き、そのうちほとんどが恋に落ちた。

俺は思った。待てよ、この特徴……どつかで……。

しかし、その女子は柏葉の机に行き、手に持っていた弁当をさつ
と出した。

「ハイ！ お弁当、春子せっかく作ってあげたのに、忘れちゃだめ
だよ！」

その言葉が言われると、さっきまで柏葉に弁当をささげていた女
子の動きが止まった。彼女らの眼に殺気が宿った。

その突然現れた美少女は、殺気にひるんだ。そりゃひるむだろう。
一人の女子が泣き崩れた。

別の女子が、柏葉君に泣きそうな声で問いかけた。

「柏葉君！ この女は何なの！？ 誰なの！？」

昼ドラじゃあるまいし。

柏葉は落ち着いて答えた。

「え？ 誰って……妹だけ。一年生の」

妹だけ。その言葉を聞き、クラスの誰もが、先生を含め、柏葉
を見て、柏葉妹を見て、ああ、なるほど、といった感じで納得して
うなずいた。

俺は途中から気づいたが、そう、この子は柏葉春子。柏葉の妹の
上のほうだ。よく俺と柏葉の遊びにくつついてきて遊んでいたから、

けっこう女子にしちゃあたくましい。それにしても、この魅力は……兄譲りか？ それとも柏葉家の特徴なのか？

男子が十人ぐらい席を立ち、じりじりと春子ちゃんに迫った。

「ぼ、ぼ、僕と付き合ってください！」

と、一人の男子が言った。

「何、ふざけんな！ お前は黙ってる！ 柏葉さん、どうかこの俺と付き合ってください……」

しかも全員運動部の硬派のエースときたもんだ。何故こんなにたくさんの人を一目ぼれさせるのだろうか。そういえば柏葉兄もこの中学への入学式で当時の上級生の女性のハートをほとんど射止めていたが。

春子ちゃんはびっくりしておどおどしていた。それはそうだろう、いきなりあの数のむさくるしい坊主頭に迫られちゃ。

柏葉は立ち上がり、坊主頭の中を割って入って、春子ちゃんをクラスの外へと連れ出した。その際、俺はドアを抑えていた。

柏葉はため息をついて言った。

「春子……お前無駄に学校をうるちよろしたら、また小学校の時みたいにファンクラブを作られるぞ？ ストーカーにだってつけられるぞ？」

春子ちゃんは言った。

「それならもう、春子のいる一年一組だけじゃなくて、一年生のクラス全部にファンクラブできちゃったし、春子ストーカーなんかやっつけられるもん」

そういつて春子ちゃんは空手らしき武術の素振りをした。そして、今日の買い物とかちよつと話して、自分のクラスに戻っていった。

柏葉の話によると、妹は小学校では絶大な人気を誇っていたらしい。また、料理だけは春子ちゃんが担当で上手なんだと。

それを盗み聞きした奴が噂を流し、学年中の多数の男子がでも「萌え〜」などとつぶやきながら『春子ファンクラブ』を始め、一年生のものと合併してしまった。なんと恐ろしき、柏葉家。

その日の放課後、俺は、熱心な運動部の勧誘を断ると、さっさと下校した。その際、美奈子も一緒だった。俺は相変わらず歩幅をずらして歩く。

美奈子は言う。

「すごかったね、今日の給食時間……」

「……ん、まあ……あの女子の殺気は怖かった」

「やっぱりカッコいい家族なのかなあ」

「うん、以前柏葉の親に会ったときは別にそんなに美形でもなかったんだけど……むしろ胴長短足で不細工なほうだったぞ」

「へえ、遺伝子の神秘だねえ」

「……確かに」

「あ、そうだ、一週間後は体力測定なんだって」

「何？ もうやるのか！？」

「うん、面倒くさいものは早く済ませておきたいって言ってた。京くんならすごい記録バンバン出せるよ」

「え、そうか？」

俺はちよつと照れくさかった。やっぱり美奈子に褒められると嬉しい。それにしても京くんはやめてほしい。

一週間後。もう四月の中旬だ。

美奈子の言ったとおり、体力測定があつた。放課後の時間にだ。スポーツテストっていう名称だったが、内容は普通の体力測定だ。英語にすればカッコいいとも思っているのか？ ちなみに、午前中にやった健康診断では、健康状態『異常に優良』だと出た。異常って何だ？ うちの学校で健康状態不良の人は出なかったらしい。一年中、恋におぼれてる奴らだ、体力がないはずがない。

体育館の中にはたくさんの人が集まっていた。俺は精神を集中した。よし、一応言われたんだし、体力測定も頑張ってみるか……

・。

「反復横とび、四十五回！」

「走り幅跳び、三メートル！」

「五十メートル走、六・三秒！」

体育館内の誰もがざわめいた。

「誰だ？ さつきからあのものすごい記録を出し続けてる人……」

「知らないの？ 三年の漆山先輩よ！」

こういう声が聞こえて、俺は少々いい気になった。

体育館の反対側から美奈子が走ってきた。

「すごいね、京くん！ やっぱりやればすごいじゃない！」

こんな注目を浴びてる最中に京くんと呼ぶのはやめてほしいが、俺は我慢した。そして、褒められたのでまたいい気になった。俺は嬉しくてへへへと笑ってしまった。

「百メートル走、十一秒！」

「砲丸投げ、四十五メートル！」

「腕立て伏せ、分間七十回！」

更にすごい記録を出した。それに触発され、体育館の反対側で柏葉も結構すごい記録を出した。俺はその後、疲れたので、熱心な運動部の勧誘を断り、教室へと戻った。頑張ればちゃんと成果が出るのか、というのは、俺にとってちよつと新鮮だった。よし、この調子で六月の運動会も頑張つてやるか！俺はそういう気持ちになった。

四月下旬。西久留米市立南部中学校では、『芸術鑑賞教室』なるものが近々開かれることになっていた。これは、まあ地域の美術館から芸術品を美術の先生が適当に取り寄せ、それをどう鑑賞するかについて語る教室だ。参加すればその日は学校の授業を受けなくてもいいが、教室そのものも大概はつまらないので、ほとんど参加する生徒はいなかった。

ある日、柏葉が放課後、校舎の裏に俺を呼び出し、俺に聞いた。

「なあ、芸術鑑賞教室、お前申し込むのか？」

俺は答えた。

「いや………っていうかそういうキャラでもないだろ、俺」

柏葉は手を合わせて頼んだ。

「頼む！ 俺はその一日だけでもいいから、授業を休みたいんだ！ 最近ますます男子ににらまれるようになって………別に不安じゃないんだが、落ち着かないんだ」

「で？ それに俺は関係あるのか？」

「いや………だから俺の名前も代わりに申し込んでほしいんだよ。だって、俺が堂々と申し込むって公表したら、どんなことになると思う………？」

俺は考えた。

「まあ、普通に考えれば生徒が殺到し、美術の先生はみんなが芸術に興味をもってくれたんだと勘違いして感激するよな」

「だから、代わりに申し込んでくれよ！ なつ、お願いだ！」

俺は仕方ないなあと言う顔をして、承知した。申し込みは教員室でするらしい。

俺が教員室に行くと、いきなり先生の一人がひっくり返って椅子から落ちた。みんなで何事かとざわざわすると、体育担当の桂谷先生であった。

桂谷先生は俺に対して一種の恐怖心をもっている。一度、俺をとつかまえて座禅でもさせようと思って放課後の校門で待っていたら、俺がナイフ持った高校生三人を素手で倒すところを見てしまったらしい。それ以来ちよつと恐れている。

「芸術鑑賞教室の申し込みを………」

と俺が言つと、ひ弱な社会の羽山先生がさつと申込書を持ってきた。俺は自分の名前を書き込むフリをして、柏葉の名前を書き込んだ。
「柏……葉……光、と」

俺が書き終わると、誰かが俺の肩を後ろから軽く叩いた。振り向

くと、そこには美奈子がいた。美奈子は俺の手にある申込書を見た。
「いないから、職員室に行ったって聞いて……ってうわっ
！ 何、芸術鑑賞教室に申し込んだの？ 京くんそういうことに興味ないと思ってたのに……じゃあ私も申し込もうっ」と
と言って美奈子は俺の手から紙を取った。

「あれ？ 何で柏葉君の名前が書いてあるの？」
と、美奈子は聞いた。

俺は答えた。

「あー、柏葉ならさっき名前を書いたんじゃないかな。俺は今から書こうと思って……」

何しろ代わりに申し込むのは確か違反だ。なぜか違反だ。出席に関わるからな。俺は美奈子の手から用紙を取り、自分の名前を荒っぽく書いた。そして用紙を美奈子に渡した。

美奈子は自分の名前を書き、用紙を先生に渡した。

「じゃあ、行こう！ 京くん！」

この『京くん』に反応して羽山先生がプツと笑ったが、俺は素早く振り向いて睨んだ。羽山先生はビクツとひるみ、もうしませんという顔をして席に戻った。

芸術鑑賞教室は数日後、四月の三十日で、俺は暇だった。まあ、それはあらかじめ予測できたことだったのだが。何しろ美術を理科と兼任する草野先生は、熱く語るのだが、明らかに生徒たちの興味をひいていない。しかし、そんなことはお構いなしに先生は語り続ける。ちなみに、教室の中には俺と、美奈子と、柏葉、それになんとなく兄についてきた春子ちゃん、そして偶然芸術に興味があった綾野、その他数人がいた。久留米も平和な一日だったので、書くことがなかった地域新聞の新聞記者たちも数人、この教室を受けていた。ちなみに昨日、綾野は、柏葉が芸術教室を受けると知ったときは、『生きててよかった』みたいな顔を一瞬だけした。もちろん、素直じゃないのですぐに隠したが。俺は窓の外を見た。外はそろそ

るジメジメした、梅雨の季節が始まる。五月いっぱい梅雨だろう。六月の俺の活躍の場、運動会に降ったりしなきゃいいのだが。俺はそんなことを考えながら先生の話を聞き流していた。

すると、草野先生が興味深いことを言った。

「ふおっふおっふおっふお。私は普段は美術館などから作品を借りるのだが、次のは違う。この作品は、なんと私の生徒が作ったものだ。とても出来がいいので、よく見ていただきたい」

そうして、先生は一つの作品を取り出した。教室にいた誰もが息をのんだ。

その作品は、普通の人が見たら、一瞬にして、間違いなくプロの作品だと言っだろう。芸術に関しては全く無知な俺でも、その作品は素晴らしいものだと分かった。題名は、「天使の誘惑」であった。作品に描かれた世界は、中世のものだろうか。服装も古かった。絵の中には、文字通り、美しい男の天使が舞い降り、町の人々がひれ伏すようにして、また惹かれていた。天使の目はぱっちりして、髪の毛は茶色がかかっていて……。ってどこかで見たことあるぞ！ よく見ると、柏葉によく似ているじゃないか！ 柏葉に古い服を着せ、天使の輪を頭の上に乗せ、そして翼をつけたらこの絵の中の天使に瓜二つだろう。誰がこんな上手い絵を……。よく見ると後ろには、柏葉に近づこうと喧嘩している女性たちがいる。俺は思わずぷつと笑ってしまった。誰がこんなに現実を上手く描写しているんだ？

先生は、観客が度肝を抜かれているのを見て、草野先生は満足そうに言った。

「ふおっふおっふお、素晴らしいでしょう。なんとこの作品を描いた不世出の天才画家はこの観客の中にいます！」

みんなの頭が辺りを見回した。だが、そのような人はいなかったが……。

先生は言った。

「その画家の名前は……。瀬戸美奈子！」

と、草野先生は美奈子に指を指していった。

俺は飛び上がりそうなくらい驚いた。他のみんなも同じく驚いた。美奈子は別におとなしくて優しい女子としてまあ人気はあったが、決して目立つほうではなかった。それが、こんなに見たものを感激させる絵を描ける画家だったとは……！ この絵を描ける画家なら、間違いなく不世出の天才ではないかと思った。

俺が何かを言おうとすると、後ろから来た人の大群に吹っ飛ばされ、壁に当たった。

「ぐはっ！」

俺はそのまま振り返りながら倒れこんだ。

その集団とは、先ほど後ろの方で教室を見ていた記者であつた。美奈子は、新聞記者に囲まれていた。それはそうだろう。町内新聞に載せる程度の記事を書くつもりだった記者が、こんな傑作に遭遇してしまつたんだからな。美奈子が絵を描くのは知っていたが、まさかこんなにすごいとは……。

草野先生は満足そうにふおっふおっふおと優しく笑つていた。

第二話 五月（前書き）

芸術鑑賞教室で、不世出の天才であることが判明した美奈子。これを境に、俺と美奈子、二人の人生は大きく変わっていく。

第二話 五月

芸術鑑賞教室のあと、美奈子はいろいろ町内新聞から町内テレビまでに出るといわれた。学校内では、もはやに美奈子はスターだった。知名度だけなら柏葉兄弟や、喧嘩の悪名轟く俺に並ぶほどだ。

町内の新聞はもちろん、町内テレビにもしつこいほど紹介され、近いうちにもっと大手の新聞や、テレビの放送局関係者も来るとのことだった。そうなたらさあ大変。今までは美奈子に振り向きもしなかった奴らが、柏葉春子のブロマイド片手に美奈子を追いかけ始めた。それも、学校内でも随一のストーカー共だ。

梅雨が始まり、毎日がじめじめするようになった。あまりの湿気で、寺の中でもいろんな食べ物がかび始めた。まあ、手入れが悪かったんだろ。と、思ったら、別にとんでもなく手入れが悪いのではなかったらしい。俺の部屋の畳がある日臭かった。あまりにも臭かったので上げて見たら、カビが生えていた。畳屋が来て、畳を換えてもらった。今度はカビ防止の畳を買った。それで俺の今月の小遣いは全てなくなった。しばらく柏葉とかにお金を貸してもらった日々が続くそうだ。

事件は五月の十三日に起きた。俺と美奈子はいつものように学校から帰っていた。校門を出て長い坂を登った辺りで雨が降り出した。俺はちよつと止まって引き返し、美奈子の分も傘を取ってくると言った。美奈子はすぐそばの建物で雨宿りをした。

俺は坂を降り学校に走って戻り、校庭を横切って学校の玄関から傘を取った。俺がまた先ほどのところに戻る途中で、なんと悲鳴が聞こえたのだ！ しかも聞きなれない悲鳴ではない。

俺は校門のところまで急いで走った。すると、そこから美奈子が雨宿りしているところが見えた。三人の男子が、美奈子がいるところを取り囲むように立っていた。俺は目はいいいので、すぐに俺の学

年ではないと分かった。俺の数々の武勇伝を知らない下級生か……。……。そいつらは、背の高い、ひよろつとしたがり勉のような奴と、背の低い太っちょの奴と、そして例の野球部の瀧澤であった。

俺は思った。あいつら……。……。柏葉がいてもてないからって、美奈子にちよつかいだしてやがる！ 俺は急いで坂を駆け上がった。がり勉の奴は言った。

「お、おい、お前この前町内テレビに出てた瀬戸……瀬戸何とかだろ？ 天才画家って言われてる……。……。しかも結構可愛いじゃん。お、おい、この俺と付き合わないか？」

太っちょの奴は言った。

「ばーか、瀬戸先輩がお前みたいながり勉オタクと付き合うかってんだよ。どうせ付き合うならこの俺のようなくましいスポーツマンだろ。」

瀧澤は割って入った。

「お前ら二人とも黙ってるよ！ この女子には俺が目をつけたんだ……。……。誰にも邪魔はさせないぜ」

がり勉は反論した。

「お、おい、そりゃないぜ、瀧澤！ お前俺たちを連れてきたのはあのいつもまとわりついてる漆山何とかを倒すためだろ？ ほら、あの筋肉ばっかしで頭からっぱな奴。だったら報酬は……。……。」

太っちょも言った。

「そうだ、漆山何とかがどんなにすげーかはしらねーけど、どーせ口ばっかりのへなちょこさ。いくら背が高くても喧嘩にはかてねよ」

「……ま、どうせ弱いだろうな。それより……。」

瀧澤は怪しい手つきをしながら嬉しそうに美奈子に迫った。一瞬美奈子の尻に触ったが、美奈子はその手を叩き落としたので、瀧澤はますます嬉しそうであった。多分生粋の変態なのであろう。

坂を駆け上がった俺は、この時点でぶちきれた。

「まず、誰が口だけだあああああああ！」

俺はそう叫びながら、飛び上がり、その太つちよの顔にとび蹴りをお見舞いした。

「ぶばおおおお！」

太つちよは気味悪い悲鳴をあげながら吹っ飛ばされ、そばの壁にぶつかり、地面に落ち、そのまま急傾斜である長い坂を転がり落ち始めた。

俺は重心を変えずに回転した。

「そして、誰が筋肉ばっかで頭空っぱだあああああああ！」
そう叫びながら、俺はがり勉のわき腹にきつい後ろ回し蹴りをお見舞いした。がり勉の体は驚くほど弱く、いっしゅん骨が折れたんじゃないかと思つた。がり勉は腹を抑えながら雨の坂道に顔から倒れた。

「そして！」

と、俺は自分の回転を止め、瀧澤をにらみつけた。

「ひっ！」

瀧澤は恐ろしそうな顔をして、一瞬パツとひるんだ。俺はその隙を見逃さずに瀧澤の間合いに踏み込み、ぐっと構えた。

「何してんだ、この変態があああ！」

俺はそう叫びながら瀧澤の腹を思いつき殴った。瀧澤はデブなため、パンチの威力は半減されたが、それでも相当効いたようだった。
「うつぶ、・・・・・・・・ぐえっ！」

瀧澤は腹を抑え、吐きながら倒れた。

俺は美奈子のほうを見た。

「大丈夫か？ 怪我はないか？」

美奈子はあるがとうという感じで俺を見た。

「うつん、怪我はしてない・・・・・・・・ありがと。すごく怖かった。喧嘩までさせちゃってごめんね」

俺は答えた。

「いや、こういう風に喧嘩するのは小さい頃からずっとやってるから、別にいいんだが・・・・・・・・それにしても一瞬だったな。こ

いつら、俺に挑戦するのは百年早いぞ」

俺は手に持っていた傘を見た。「ぎゃあああ！」

美奈子は驚いた。

「何？ 京くんどうした！？」

俺は手に持っていた美奈子の傘をみた。強く握りすぎて、また坂を駆け上がっているときいろんなものにあたっただけ、ぼろぼろになっていて、使い物にならなかった。俺は申し訳なさそうに言った。

「すまん……傘壊しちゃったな。俺の傘をやるよ」

美奈子はなんだか複雑な心境のようだった。

「私……いつも京くんに守られっぱなしだね……いつも迷惑をかけてる……」

俺は慌てて言った。

「そ、そんなことないぞ！ 俺は別に好きでやってるんだし。だからいろいろ考えなくていいぞ！ な！」

美奈子は自分に納得していないような顔だった。

俺は自分の傘を美奈子に渡して言った。

「……早く行こうぜ」

美奈子は申し訳なさそうに傘をさして歩き始めた。

俺も後から、かばんを頭の上に持ち、出来るだけ濡れないようにしてついていった。

俺たちは無言で歩いた。

その日の晩のことだった。

「京介え……」

親父の大きな怒鳴り声が、寺中、いや、近所中に響いた。俺も自分の部屋で飛び上がるほどびくりした。親父がこんなに怒鳴るといってもいいことはない。しかも大概俺は運の悪い出来事に遭遇してしまうのだ。

といっても今行かなければ明日から寝泊りする場所がなくなるの

で、俺はしぶしぶ居間に行った。俺は驚いた。なんと居間にいるのは、瀧澤ではないか！ その横には、瀧澤の親父らしき人物がいる。なるほど似ている。瀧澤の鼻の下にひげをつけ、そしてもつと筋肉質にしたら大工である瀧澤父にそっくりだ。しかし、根性が捻じ曲がっていそうなのは瀧澤息子だけであつた。瀧澤父の方は、温厚誠実な一方で、頑固一徹にも見えた。

俺の親父は低い声で、俺を睨み上げながら言った。

「京介……お前、瀧澤の坊ちゃんに喧嘩を理由もなくふっかけたそうだな……」

瀧澤父は言った。

「いや、あくまでもそう息子は言ってるんですね、でも私からしたら漆山さんの息子さんがそんなことをするはずもないと……」

思ってるんですが、どうなのでしょう」

親父のはげ頭に電灯の光が反射して目に当たった。とてもまぶしかったので、俺は目を細めた。これじゃまるで警察でやるような事情聴取だ。

「ちげーよ、それは瀧澤が美奈子にちよつかいを出してて……・セクハラもだ」

瀧澤父はキツと瀧澤を睨んだ。

「それは本当なのか、寛一！？ もしお前が言ったのが事実無根なのだったら……」

瀧澤息子は慌てて弁解した。

「いやいや、ぜんぜん嘘じゃないよ、父さん！ それに……」

瀧澤息子はいやらしそうに俺のほうを見て言った。「証拠なんてないだろう？ 証拠が……」

俺はこの瀧澤息子をこの場で殴ってやりたかったが、それじゃ逆効果だ。

瀧澤息子は、いやらしそうにへっへっへと笑っていた。どうだ、証拠なんかあるなら見せて見やがれ、と言った具合であつた。

親父は言った。

「わかつてるよな、泥を塗るなら……出家だ。もう青森の寺と話がついている」

何！ 青森だと！ そんなところに行つてたまるか！ 俺は考えた。どうすればこの場を上手くしのげるか……せつかく最近は退屈な春休みを終えて学校生活が面白くなってきたんだ。こんな奴のために罰として出家させられてたまるか。

俺が考え、親父の目は自分のはげ頭のように怪しく光り、瀧澤息子はへっへっへと笑っている中、急にインターホンがなった。そして、声がした。

「あのー、すみません！ 京くんいますか？」

門の方から聞こえる声は、間違はなく美奈子のものであった。

瀧澤息子は急にやばいぞという顔をして、ちよつと席を立とうとして言った。

「さて、ちよつと帰ろうかな……」

しかし、瀧澤息子は瀧澤父によつて固く席に戻された。

坊さんの一人が美奈子を居間に連れてきた。右手には俺の傘を持っていた。俺が帰るとき渡したものだ。わざわざ返しにきてくれたのだろうか。

美奈子は瀧澤を見るなり、坊さんの後ろにささつと隠れた。

親父はそれを見て問いかけた。

「おや？ 美奈子ちゃん、何故この瀧澤君を避けるのかね？」

美奈子は優しすぎる人物だ。こんな瀧澤の野郎にも、名誉を傷つけていいのか、などと考える。仕方ないので、俺は『言っても構わないぞ』と動きで伝えた。

美奈子は言った。

「その……今日の放課後、この人……私のお尻を触ったり、迫ってきたりして……怖かったです……」
ナイス、美奈子！ グッジョブ、美奈子！ 俺はそう思った。しかし、次の瞬間びくつとした。

さつきまで『善』だった瀧澤父の顔が、突然百パーセント『悪魔』に変わっていたのだ。冷酷無情、極悪非道。先ほどの顔とは違い、きつと頭の中では、どうやって息子を容赦なく懲らしめようか考えているのだろう。ちなみに、瀧澤息子は終わった、もうこの世は終わったみたいな絶体絶命な顔をした。瀧澤父の顔から察すると、確かに美奈子の一言で瀧澤の命は途絶えたのかもしれない。そう考えると、ちょっとだけ可愛そうに思えた。しかし、瀧澤の行動を考えると、思う存分懲らしめられたほうがいいという気持ちになった。さらば瀧澤。

瀧澤は連れ去られる中、最後まで泣きながら許しを請うていたが、それは父親にとっては馬耳東風であり、全く聞こえないのであった。美奈子は俺に傘を渡して、ありがとうと礼を言って帰ろうとした。すると、親父が珍しくフェミニンなことをいい、女を家まで送るのは男の義務なんたらかんたら言っていた。俺は美奈子を言えまで送ることにした。別に遠いわけでもないのに……。

俺が美奈子の脇を歩いていると、道の先で影が動くのが見えた。

「まずいぞ、あの漆山がいる！ 今日退散だ！」

そういつて、影は飛び去っていくように消えた。何かを落としていたので、拾ってみると、『美奈子ラブ！』と書いてある、『瀬戸美奈子を近くで見守る会』の会員証であった。写真つきで。やばいぞ、これは……美奈子は顔立ちは可愛いほうではあったのだ。ただ、今まではもつと派手な綾野や、最近では柏葉妹に注意がいつてただけで……。『近くで見守る会』ってどう考えたってストーカー連盟だろう……。連中は他にすることがないのか？

「それなーに？」

と美奈子が俺の後ろに来て言った。

俺は慌ててゴミ箱の中に投げ捨てた。

「な、なんでもないぞ！ 破れた使い捨てのテレカだ」

美奈子はゴミ箱の方を見た。

「ふーん」

俺はそのまま美奈子を家まで送った。すると、先ほどのゴミ箱をあさっている奴がいるではないか！ しかも、何かをつぶやきながら夢中に探していた。

「あれがないとリーダーに叱られる……瀧澤はもうつかまっただというのに……」

俺はぶちつと切れた。

「おらあ！」

俺は闇の中で、その人影にラリアットを喰らわせた。

「ぐはあ！」

その男は倒れ、俺はそいつの胸倉をつかもうとした。しかし、そのとき何か俺の顔に投げ込まれた。それはパンという音を立てて割れ、白い粉を撒き散らした。目潰しであった。

「うわっ！」

俺は急いで目を守った。しかし、その隙にそのゴミ箱を漁っていた男は逃げてしまった。

組織的に行動してるのか……？ 俺はあきれた。こんな夜になつてもストーカー行為を働いているのか……。しかし、俺はなんだか悪寒がした。そうだ、その美奈子のストーカー共は隙あらば美奈子に言い寄りたいんだ……。そうなると、最大の障害物は……。俺じゃないか！ 俺は狙われて当然というわけか！ なんてこった！ 喧嘩をしたら地方に出家させられるなんて事実を知られたら、ひどく狙われるぞ！ 俺はまた狙われたりしないように、急いで帰った。

それから一週間ほどが経つ。瀧澤はあれ以来学校に来ていなかった。先生に聞いたら、一学期は休学と、親が言っていたそうだ。俺は瀧澤に冥福を祈った。

昼休み、みんなが弁当を食べ終わり、柏葉は読書をし、女子の大半はそれをつつとり眺め、それを見た大半の男子はお互いを慰めあ

いながらやけくそでスポーツでもしにいった。草野先生が教室に来た。

「瀬戸君、……あと、そして漆山君も……」

俺はなんだかよくわからなかったが、美奈子といつしよに草野先生の美術室まで行った。

草野先生はいきなり真剣な顔をした。

「さて、いきなり本題に入ろう」

俺はずっこけた。前置きとか挨拶とかなしかよ。相変わらずこの先生は奇抜だ。

草野先生は言った。

「瀬戸君、君の作品を知り合いの評論家に見せたところ、大変見所がある生徒で、だから六月の全国美術コンクールに出品してほしいとのそうだ。その結果でいろいろと決まるからな。君はこれによって知名度が上がり、いや、それどころか君の才能なら、金賞辺りも狙えそうだ。大出世のチャンスだよ、瀬戸君」

美奈子は信じられないというような顔をしていた。

俺は美奈子の肩を叩いた。

「すげーな、美奈子！ 大チャンスだぞ！」

草野先生は俺をびしっと指で指した。

「そこで、漆山君、君が入ってくるのだ！」

俺はびっくりした。

「え？ 何ですか？」

草野先生は力強く言った。

「瀬戸君は、ちゃんと作品に没頭できると、最高の作品を作り出せるのだ！ そのためには、君がちゃんと付き添って、その集中が乱れないようにしてもらいたい」

俺は混乱した。

「え？ ということですか？」

「つまり、瀬戸君が作品に没頭できるようにしてほしいのだ！ 私だって目は節穴じゃない。瀬戸君が注目されて以来、瀬戸君を取り

巻き不特定多数の男子生徒がストーカー的行為を行っているのも知っているが、特定できず証拠もないので捕まえられん」

美奈子は驚いた様子だったが、俺はすでに気づいていて、むしろ何もしてなさそうだった先生が知っていたのがびっくりだった。俺は言った。

「先生、そのこと知っていたんですね……」

草野先生は言った。

「何、校長を含め、保健の竹内先生、数学の林先生、体育の桂谷先生、国語の赤碕先生など、みんな知ってたよ。ただ、今は急に編入してきた柏葉妹を合わせた柏葉兄妹の対策を練るので先生達もみんな精一杯」

「あれ？ 柏葉春子ちゃんって普通に入学したんじゃないですか？」

「最初は高級エリート私立を薦められてたんだが、兄同様お金のために断って、それで兄のいるこの学校に編入してきたというわけだ。学校としてはこうなることは予測できたから編入試験を難しくして落とそうとしたんだが、満点をとられたんでな。ふおっふおっふおっふお」

俺は沈黙した。やはり柏葉家は恐ろしいという俺の推測は間違っていないかった。ありとあらゆる点で柏葉家は凡人を越しているのだ。

草野先生は続けた。

「そこで、本題に戻るが、集中のために瀬戸君の作業中は付き添ってほしい」

俺はびっくりした。

「冗談じゃないですよ、草野先生！俺だっているやりたいことが……」

「そこを何とか頼むよ、いるだけで威圧感を発してストーカーどもを寄せ付けさせないなんてことができるのは漆山君しかおらんだ」

「いや、いくら草野先生の頼みでも……」

「君は友達の助けになりたくないのかね？」

「でも……」

「何だ？ 何か問題があるのかな？」

俺は美奈子をちらつと見た。

「いや、実は……喧嘩をこれ以上したら親父に出家させられるんです」

「そうか、君の家は寺だったね。学校側でなら出来ることはなんでもするが……」

俺は沈黙した。

草野先生は言った。

「期間中は、全教科の授業と試験の単位を無条件で差し上げることになったのになあ……」

俺は飛び上がった草野先生の手を握った。

「やります！ やらせてください！」

いとも簡単にのせられてしまった俺であった。五月二十日のことであつた。

やるべきことは簡単であつた。今から六月六日のコンクール作品の締め切りまでずっと、放課後まで美奈子のボディガードとして安全を守り働くことだった。美奈子は毎日学校に来て、午前中は授業を受け、午後は美術室でずっと草野先生にアドバイスをもらいながら作品に取り組んでいた。それが、なぜか俺には見せてくれない。見ようとしたら、いつもちよいどいい具合に窓にストーカーがいる。俺はそいつらを追い掛け回すだけで一日を費やす。

ある日、俺はサボるつもりで外に出たが、珍しく涼しい日で、気持ちよかつたので、俺は美術室の見回りをすることにした。

すると、美術室の裏に、なんと坊主頭の生徒が三人ほど、窓のところでこっそり中を覗いているじゃないか！

「お前ら、何をしてるんだ！」

と、俺は低い声で言った。

男子生徒達は驚いて飛び上がった。

「あつ！ 漆山先輩！ 違うんです、これは……」

俺は一瞬にしてそいつらの中に飛び込んだ。

「言い訳は後で聞く！」

俺はそいつらが逃げようとするので後ろから手をつかみ、三人とも地面にねじ伏せた。そして、俺はさつと後ろに振り向いた。この前みたいに目潰し食らっちゃたまらないからな。俺はねじ伏せたまま、そばにあったホースで三人を縛り上げた。

俺は三人とも草野先生の所に連れて行った。

俺が美術室の中にその三人を連れて行くと、草野先生は言った。

「その生徒達は、もしかして覗いていたのかね？」

俺はそうだと言った。

突然、草野先生の分厚いメガネが怪しく光った。

「ふおっふおっふおっふおっふおっふお。それなら、罰として……」

と、草野先生は言つて、考え込んでしまった。

俺はそれを見て思った。罰、考えてなかったんだ……。すると、そのときちょうど、若き国語教師、赤崎先生が部屋に入ってきた。

「失礼します、草野先生、その漆山君のボディーガード期間中無条件満点成績のことなんですけど。って何ですか？ このホースで縛られている生徒達は」

「ああ、この生徒達なら覗き禁止命令に背いて瀬戸君の作業を除いていたんです」

赤崎先生は生徒達を見て、考えてから言った。

「それならいいですよ、草野先生。こいつらの一学期の成績を落としますから」

突然、生徒達は俺が抑えていたホースを引きちぎって、倒れこんでから急いで体勢を立て直して、赤崎先生の前で土下座をした。

「お願いです！ 先生のクラスむちゃくちゃ難しくて、やっと今の成績なんです！ お願いです！ 落とさないでください！ 本当にお願いです！」

と、生徒達は泣いて頼んでいた。仕方が無いので、赤崎先生は成績を一段階下げるということにした。

俺がボディーガードを始めてから一週間。すでに十人ほどの生徒を、覗きとして捕まえた。しかし、そいつらを更生させると、別の奴らが美奈子の覗きを始めるのだ。まったく分からない仕組みだ。五月はずっと梅雨の真っ最中だったから、湿気で奴らの頭がいかれてしまったのかもしれない。

俺はいい加減、毎日のみんなから遅れをとるのも嫌になり、毎日運動部系の奴らと逃がさないように格闘するのも疲れた。やめようとさえ思ったぐらいだ。

しかし、そんな時、美奈子が無造作に隠さずに作品を置いていたので、俺は見てしまった。

その作品は、まだ構図だけであつたものの、なんとなく凜としていた。設定は現代か、少し昔の昭和のようだった。駅のプラットホームだろうか。若い男女がいる。男は兵士の格好をして、目を閉じて泣いている。戦争に駆り出されるのであるうか。女性を抱きしめている。そして、女性は涙こぼしながら若い男を抱きしめ返している。汽車はもうすぐそこまできている。

俺は、思わず涙を流してしまった。

なんて心を打つ絵を描くんだ。何気なくいつもそこにいた俺の幼馴染が、こんなにも人の心を変えられる人だったとは……。美奈子はやはり草野先生の言うとおり、不世出の天才なのだろう。絵がこれほど人の心を打つことが出来るものだとは知らなかった。俺は、たとえこの先何があるうと、ずっと美奈子を応援し続けようと思った。

コンクール出品まで、残り一週間となった。

第三話 六月（前書き）

美奈子のコンクール出品のために時間を捧げてきた京介。六月に入
って彼が巻き込まれるさまたまな出来事とは・・・？

第三話 六月

六月になった。梅雨もだんだん弱くなってきた、それと同時に学校みんなの心も晴れ始めた。長いジメジメした季節を終え、ようやく久留米はあるべき姿へと戻りつつあった。そろそろ暑くなってきた。もう夏なのだろうか。

美奈子の作品は、完成に近づくにつれてどんどん素晴らしいものになっていった。俺は見るたび心を打たれた。次々と生徒が作品を見に来るので、俺は窓のカーテンを二重にしてがっちりと閉め、使われていないときは部屋の鍵を二重に閉めるまでする羽目になった。草野先生によると、『最後までなるべく秘密にしておかなければ』だめだそうだ。それで俺は部屋と作品の管理という、面倒な仕事を任された。

ついでに、草野先生は俺を画材管理・購入係に任命した（何が『ついで』なのかわからないが）。

俺はこの作品のコンクール出展に関して、何か大切なことを見落としている気がした。しかし、思いつかないので、別に大切でもないんだろうと思った。

しかし、俺は次の日気づいた。

人気によりいつの間にか学級委員的な役を回されていた柏葉は、いまや実質的なクラス委員長になっていた。その選挙はまだだというのに、やはり人気がものを言うのか。柏葉はいつも乗り気なのでスピーチや実行委員など軽く引き受けてしまったらしい。

柏葉は朝のホームルーム、教室の前の教壇に立った。同時に、ほとんどの女子の集中が一気に向けられた。統率力なら柏葉が一番なはずだ。少なくとも、女子と、あと人気のおこぼれを狙う男子などの間なら。もちろん、柏葉は好かれる性格のため、普通の友達の数も半端ないが。

「よし、みんな、六月六日の運動会のクラス対抗種目では、頑張

って他のクラスを倒すぞ！ 一組が勝つ！」

と、柏葉は宣言した。同時に、ものすごい勢いで女子から「キャー！ 素敵！」などの声援があがった。教室がゆれるほどの声だった。他のクラスから何だ何だと先生が見に来るほどであった。

俺ははつとした。そうか、運動会か！ 六月六日は運動会だ！

一応体を馴らしておかないと活躍できないから、そうしたいんだけど、六月六日は作品のコンクール出品の日でもあるじゃないか！ これじゃ運動会に向け特訓が出来ない……なるほど、これを見落としていたのか。まあ、俺なら負けないがな、という自信はあったが、一応トレーニングはしたかった。

仕方がないので、次の日からボディーガードをしながらトレーニングも始めた。手始めに片手で腕立て伏せをやった。

「すごい、京くん！」

と、美奈子は筆を置き、喜んだ。

「何？ そんなにすごいか？」

俺はちよつといい気になって、逆立ちをし、そのまま腕立て伏せをはじめた。

美奈子はまた驚いた。

「すごい！ これなら運動会も楽勝だね！」

さつきから自分も見ていた草野先生は、ハッと気づいた。

「漆山君、瀬戸君の仕事の邪魔してどうするんだね」

俺もハッとした。草野先生だつて見ていたくせに。

「すみませんでした」

仕方がないので、俺は部屋の外に出て、外の鉄棒などを使ってトレーニングを始めた。それはとても人目を引いた。授業中なのに生徒は窓を開け、「すごい！」などの声が俺に向けられた。俺は無反応だった。授業の途中だったのに生徒が集中できなかったと、後で先生たちに怒られた。

数日後、絵は完成間際であり、運動会も刻々と近づいてきていた。気がつくと、いつの間にか柏葉兄妹も作品作りに参加していた。

どこまでも乗り気な兄妹だ。柏葉兄は画材やいろいろ運ぶのを手伝ってくれたりした。柏葉妹はただ見ていただけだが、一度『春子ファンクラブ』に見回りをさせたら、人数が多いから効き目があった。俺は画材屋さんから絵の具のバケツを何十個と、絵筆を百本ほどを買わされ、学校まで担いでいた。重いとは思ったが、美奈子のためなら、と思うとそう苦でもなかった。まあ、じゃんけんで柏葉に負けたのだが。そのとき、急に俺の後ろで車のクラクションが鳴った。

後ろを振り返ると、漆黒の高級車が六月の暑い日差しの中、狭い道を走っていた。その道のと真ん中にとんでもない荷物を担いだ俺がいたのだ。

中から、金髪の、青い目の少年が出てきた。

俺は『外人？ やべえぞ、俺英語は1だぞ！』と思ったが、平静を装った。

金髪の少年は流暢な日本語でしゃべった。外国人にしてはすごいというより、よく見ると顔はまんま日本人の、ただ特別美形な方であった。そして、青い目はカラーコンタクトであった。

「ここらへんに西久留米市立南部中学校とかいうのがある。どこだか知らないか？」

俺はほっとした。なーんだ、日本語か……。そして、はっとした。そんなことを考えている場合ではない。

「何だ、何の用で行くんだ？」

と、俺は睨むようにして聞いた。

金髪の少年は答えた。

「おやおや、穏やかじゃないね。ちょっと、今度全国コンクール優勝本命の娘の作品があるって聞いたんでね……。ちょっとそれを見せてもらうかな、なんて」

俺は荷物を置き、睨んだ。

「なんだと……。どうするつもりだ」

金髪の少年は怪しく笑った。

「どうするって．．．．．持っていくしかないでしょ」

俺はぞくつとした。この少年の見せた怪しい笑顔は、紛れもない『悪』だ。こいつはよく漫画とかに出てくる、『目標達成のためには手段を選ばない』人間だ。実在する人種ではないと思っていたのだが．．．．．。もしかしてこいつは、日本経済を牛耳る親を持つ、ライバルをつぶして回る画家志望、とかじゃないだろうな．．．．．。

俺がそんなことを考えていると、黒い高級車からとんでもなく体がでかいプロレスラーのような人間が出てきた。レスラー用のパンツ一丁であった。俺は思った。おいおい、中学生がプロレスラーに勝てるわけないだろ．．．．．しかもこんなパンツ一丁の変態に力がある奴が必要だってことは、やっぱり有望な画家をつぶして回ったりしてるのか？

しかし、そのとき救世主がやってきたのだ！ 柏葉が、やっぱり荷物は大変だろうって思ってた。そして、プロレスラーを見ておどけた。

「おいおい、何だよ京介この危険な空気は．．．．．」
と、柏葉は言った。

金髪の少年は俺が一人じゃなくなったことを見て、舌打ちをして車に乗った。そして、窓を開けてプロレスラーに言った。

「あいつら邪魔だ。始末しろ」

そういつて、車はそつとバックしながら細い道を戻っていった。かつこつかない去り方である。

俺は思った。おいおい、始末しろって．．．．．漫画じゃねーんだから。もっと現実的で平和的な手段もあっただろうに。

俺たちは身構えた。

一瞬にして、プロレスラーは飛び掛ってきた。柏葉と俺は片手ずつ受け止めた。しかし、こいつの力はすごく、少しずつ俺らは押され始めた。

「グッ．．．．．！」

くそつ、このままやられたらあの金髪少年が……美奈子の作品を……！

そのとき、柏葉妹がどこからか急に現れた。春子ちゃんはこの状況を見て、いきなりプロレスラーの間合いに入り込んで、思いつきり渾身の蹴りを、プロレスラーの股間に入れた。

そのプロレスラーのそのときの顔は、この世のものとは思えない痛々しさを表していた。そして、そのプロレスラーは叫ぼうとしたのだろうか、声にならない痛みなだけに、声はでてこなかった。ただでさえ柏葉家は力も強く、運動神経もいいのだ。渾身の蹴りが、股間に命中したのだ。しかも動きやすいパンツが仇になり、ダメージはおそらく倍増。プロレスラーは泡を吹いて倒れた。おそらくこのプロレスラーは二度とかかってこないだろう。可愛そうに……。

春子ちゃんは言った。

「お兄ちゃん、それと京兄も、美奈子ちゃんの作品がたつた今、出来上がったって！」

俺と柏葉は驚いた。

「何だって！」

俺たちは先に行く春子ちゃんを、まず気絶したままのプロレスラーを交番に届けてから、画材を担ぎながら追った。

学校の美術室に戻ると、草野先生と美奈子が作品の両側に立っていた。作品の上には、大きな布が掛かっていた。

草野先生は言った。

「柏葉君達も、あと何よりも漆山君！ 君達のおかげで瀬戸君の作品はかんせいしたよ！ ふおっふおっふおっふおっふおっ！」

美奈子は言った。

「一応、題名は『別れ』なんだけど……」

そして、布は取られた。俺と柏葉兄妹はその迫力に口を開いたままだった。

あの日、絵のスケッチを見たときからずっとずっと忘れられなか

った切なさ、今大きな波になってやってきた。その感情の波は俺も柏葉も春子ちゃんをも飲み込んで、もう俺達は涙ぼろぼろだった。出兵の前に、最後の最後まで愛を誓い合う若い男女。さまざまな絵筆で描かれた繊細な線は、見る人に衝撃を与えた。色使いも、全体的に切ない色使いであった。切ない色使いがどんなのであるかなんて、聞かれたって答えられないが。とにかく、言葉では表しきれないほど素晴らしかったのだ。

男は泣くな、と硬派のハゲ住職の親父に育てられた俺でさえ、号泣してしまった。完成した喜びもあったのだろうが、ものすごい絵だ。俺のそばにずっとこんな素晴らしい絵を描ける人がいたなんて、何故もつと早く気づかなかったのか、悔しくもなった。

草野先生は言った。

「しかしおかしい。コンクール協会から作品を受け取りに誰かが来るはずなんだがのう。漆山君に柏葉君、君達真つ黒の高級車に乗った金髪の少年を見なかったかね？　今年はその少年が受け取りをやっているんだ」

俺と柏葉はまさか……という風にお互いを見た。

「ちよつと探してきます！」

俺と柏葉はそう言つて、美術の部屋から飛び出した。

結局その少年は改めて作品を取りに来た。俺と柏葉は隠れていた。ちなみに、その少年は、柏葉妹に一目ぼれして、『春子ファンクラブ』のスポンサーになってしまったのである。部下を再起不能にした女子だとは知らずに……。

いろいろあつて、作品はコンクールに出品されたのである。

それから二日後。ついにこの日がやってきた。この土曜日は、俺が一年のうち、もっとも活躍し得る、戦場の場！　第百七回西久留米市立南部中学校運動会が、始まるうとしていた。俺は靴を履き、勢いよく家を飛び出した。今日は運動会だ。例によって、柏葉と俺

は違うチームに分けられた。俺達二人が一つの組にいたら、結果があまりにもわかりきっている、との学校全体の要望で俺と柏葉は別の組に入れられた。

結果は、俺のいた赤組が小さな差で勝った。最後のリレーで、俺と柏葉が競り合い、俺が何とか競り勝った。柏葉め、しばらく見ないうちに走るのが速くなってやがった。ちなみに、学校新記録が出たらしい。俺と柏葉の白熱のしようといったらすごかったらしい。美奈子によると、『コースの上を土ぼこりの塊が二つ、猛スピードでギョングюн飛びまわっていた』らしい。

しかし、午後のクラス対抗部門は、当たり前のように俺と柏葉がタッグを組んで勝った。リレーも、男子部門は俺と柏葉がアンカーとして楽勝し、女子部門は柏葉がクラスの女子を奮起させ、それはもうすざましい頑張りを見ることができた。

クラス対抗の最後の競技として、球技が入れた。男子混同で、バレーボールだった。うちのクラスの男子は基本的に柏葉の人氣と女子の頑張りようを見ていじめていたので、使い物にならなかった。しかし、バレーボールは俺、柏葉、黒木、綾野、野球部部長の坊主頭のナイスガイ水戸、それにその他女子三人で実力の違いを見せ付けた。三年のほかの組のバレーボール部の奴らにさえ勝ち、俺らはいい気分だった。

「クラス対抗バレーボール！ 決勝は、三年一組と一年一組で行います！」

「あれ？ 一年一組って確か………」
と、俺は言いかけた。

俺達がバレーボールコートに出ると、相手チームが出てきた。俺達は一瞬気迫負けした。

一年一組のチームは、柏葉春子以外は全員男子であり、鉢巻に『春子ちゃんのために勝つ！』と書いてあった。胸には『春子ファンクラブ』のバッジが。春子ちゃんはもともと競争好きで、そして男子の目にはラブ・ファイヤーが燃えたぎっていた。その気迫の暑苦

しさといったらすごかった。みんな、勝てば春子ちゃんに褒められると思い、それだけのために全身全霊をかけて臨んでいるようだった。

春子ちゃんはふうとため息をついて言った。

「あゝあ、春子のだ渴求ちやつたな」

もう春子ちゃんが『のだ渴求』ぐらいまで言うと、観戦をしていた一年生の男子共がたくさん、一気に新品の冷やした、この瞬間のためだけに持ってきて飲まずにもっていましたたとも言つような水筒を春子ちゃんに捧げた。春子ちゃんはその中から一つ選び、ちよつと飲んだ。その選ばれた男子は気絶しそうになり、春子ちゃんが返した水筒をまるで宝のように大事に大事に持っていた。ここまでくるともはや哀れであった。春子ちゃんは完全に一年生男子を手なずけているようだった。

春子ちゃんは号令をかけた。

「絶対勝つわよー！」

男子は全員、一気に『オー！！！！』と見事な団結力の掛け声を放った。そして、一年生の男子は死ぬ覚悟で身構えた。

春子ちゃんが最初のトスを上げた………。

あり得ないほど白熱した試合は、俺にとっての中学校入学以来のスポーツでの負けとなった。ものすごく近いゲームであり、観戦した誰もが『一生の思い出となるものを見た』と言っていた。最後の方は一年生男子は俺と柏葉に力負けしそうで、それでも恋のためにそれだけのために顔でスライディングしていたりして超々ファインプレーを連続していた。ひざをすりむこうがひじをすりむこうが汗びっしょりになるうが、果敢に俺達のチームに向かってきた。敵ながらあっぱれであった。ちなみに、終わったら春子ちゃんは嬉しさと感謝を込めてみんなをハグしていた。された男子は恍惚の笑顔のまま失神した。

長い運動会を終え、俺の創作活動の援助も終わり、俺はまた普通

の学校生活に戻った。
かのように思えた。

その次の月曜日は運動会があつた土曜日の代わりに休みだった。しつかりと休養をとつて、火曜日にみな登校した。六月九日であつた。

若き国語の先生、赤崎先生は言った。

「えゝ、六月二十五日から二十七日まではなんだか知ってますか？」

俺は考えた。何かの祝日か？ 違うな。何かの週間か？ にしては短すぎる。何かの記念か？ それにしても……。

などと俺が考えていると、黒木が言った。

「はい、先生、期末試験ですネ」

俺は驚きのあまり机を叩いて立ち上がった。

「なぬーっ！？」

赤崎先生はにつこり笑つた。

「さすが黒木さん。そうです、皆さん、六月二十五日から二十七日までは期末試験ですネ。一応僕が君達のホームルームの教師だから言つておくけどネ。毎年のように結果は点数順に張り出されて、確か総合のトップ二人、男子一人女子一人は草野先生から賞品が贈られるらしいよ。漆山君、もう座つていいよ」

最後のひとことにクラスがどつと湧き上がった。そして、みんなは今年の賞品が気になった。毎年変なものが贈られるからだ。去年は怪しげな壺だったし、一昨年は一世代前のゲーム一式であつた。

俺はそれどころではなかった。別に美奈子のボディーガードをしている間の成績が落ちたわけでもない。その間は成績もしっかり草野先生に保障されてたからな。しかし、期末試験だったら、どう考へてもその保証の中に入っていない。俺はもともと頭はそれほどよくないが、更に授業も半分受けていなかった期間が二週間あまりもあるのだ！ これはやばいぞと思つた。

俺は柏葉にすがつた。

「なあ、柏葉あ、俺はどうすればいいんだよ。このままじゃ成績があ」

声まで絶望的になってる。

柏葉はいつもの明るさで答えた。

「なら、試験前四、五日ぐらいは勉強会やろうぜ。俺と、あと瀬戸ちゃんとかも助けてくれるだろ。あと、黒木や綾野も」

俺はそれが名案のように思えた。俺は決めた。

「よし、俺の家でやろうぜ」

クラス中の女子がこの会話をピックアップしたのは言うまでもない。そういう点では柏葉はケアレスだ。みんな来てわいわいやったほうが楽しいと思ってるからな。

一瞬にして急に俺に親しく振舞う女子が増えた。もちろん、誰もが結局は勉強会に参加させてくれというのだ。俺は、自分の家でやることにしてよかったと思って、全て丁寧に断った。あんな人数を連れ込んだら期末試験の前に親父に出家させられるってんだ。

結局、勉強会は六月二十日から毎日、夜やることになった。ちょうどその週間は、昼から夕方にかけて、寺で葬式やら法事やらやる予定でびっしりだったので、夜には残り物の食べ物とかも期待できた。

それまでの時間は、俺は家に帰るなりすぐ勉強を始めることにした。

そして、あつという間に二十日になった。勉強会のメンバーは集まった。俺、柏葉、美奈子、黒木、綾野、そしてなぜか柏葉妹・春子ちゃんと、野球部部长・水戸もいた。水戸は純粹に助けが必要なのであって、またあのクラスでは珍しく柏葉をただのいい奴と思っている男子だったので参加を許可した。ちなみに、春子ちゃんがいる理由は、

「だって春子暇なんだもん」

だそうだ。家にいても、妹は小学生でちょっと遊べないし単純だし、親は仕事で疲れて寝ちゃうしで暇なんだと。

俺の呼ぶメンバーの算段がよかったのか、勉強会は四日間波乱なしで行われた。ただ、綾野は毎日柏葉を見るために来ているような点もあった。褒められるために勉強しているような点もあったが。

そして、俺の命運を決める日が来た。別に命がかかってるってわけでもないけど、成績が悪かったら間違いない親父に悪い印象を与えてしまい、ちょっとしたこと寺に出家させられそうだから、この試験で上手くやる必要があるんだ。

試験前。誰もが謙遜して、自分は全く準備をしていず、今回は捨てたなどと言っている。そんなはずもないのに。また、試験の『山の予想を言い合う。そんな空気の中、俺は黙々と精神統一をしていた。

考えてみれば、あれは贅沢な勉強会だった。男子では柏葉に教えてもらい、女子では黒木や美奈子に教えてもらった。みんな学年トップクラスの秀才だ。

先生が、みんなが机の上に何も置いていないかを入念に確認し、試験用紙を配り始めた。そして、時計を見ながら、ぴったりの時間ではじめるようにして、

「始め！」
と告げた。

闘いは始まった。教室の窓の外はもうすっかり夏だった。

そして、また俺はまた一つ、修羅場を潜り抜けた。生き抜いた、というほうが自然かもしれない。とりあえず試験を途中でサボって抜け出すなんてことをしなかっただけ、例年よりはましだろう。試験が終わると、例によって生徒達は寄って集って「駄目でした宣言」をやっていた。

「いや、もう駄目だった。もう終わりだ」

「もうどうにでもなれ！」

そんな声が教室中に轟いていた。

そんな日が三日も続いた。試験が終わる頃には、もう誰もが夏を

待ちわびていて、夏休みを待ちわびているようだった。

第四話 七月

七月である。夏休みはもうすぐそこに来ている。教師達も生徒達もみな浮かれ気分であつた。

そんな最中、嬉しい知らせが、わが西久留米市立南部中学校に届いた。それは、暑い暑い夏の日であつた。期末試験もようやく終わり、七月に入つて一週間半ほどした時であつた。

いつものように何気なく授業を受けていると、校庭からバイクの音がした。バイクの音？ 何故？ ここらへんは時代遅れの不良みたいなのはいても、暴走族はいない。何故学校にバイクの音が？

見てみたら答えが分かつた。校庭に入ってきたそのバイクは、郵便局の人であつた。山門校長先生が走つてバイク便を取りに行くのが見えた。山門先生、せっかく校長先生なのにばしられてるような気がした。

しかも、いまだきバイク便つて……インターネットもあるこの時代に？ ウケ狙いじゃないと使わないぞ。

山門先生は、バイク便を見て、急いでこっちに走つてきた。

「三年一組の瀬戸美奈子君！ 君宛にバイク便が来ているぞ！」

俺は思わず立ち上がってしまった。美奈子はバイク便を山門校長先生から受け取り、封筒を丁寧に開けて中身を取り出した。そして、中に入っていた通知のような紙を読んだ。

少し沈黙の間が開いた。先生さえもがじつと見ていた。

そして、美奈子は急に嬉しそうに顔を上げた。

「全国芸術作品コンクール、私が最優秀作品賞を取つたって！」

みんな、一瞬それを飲み込むのに時間が掛かつた。どう喜んでいいのか分からなかつたのだろう。俺はたまらず雄叫びを上げた。みんなも続いて歓声を上げた。上の階の下級生も声を聞いて察知し、歓声を上げた。校舎は一瞬にして喜んで叫ぶ人ばかりになった。

三年一組の誰もが、美奈子に寄つて行つて持ち上げ、胴上げをし

た。

「おめでとう！ 最優秀！」

「最優秀！ 最優秀！」

先生達も思わず授業をやめ、一緒に胴上げをしていたほどだ。それほどみんな、一緒に喜んだ。

「わっしょい！ わっしょい！」

「おめでとう！」

胴上げはしばらく続いた。

その放課後。俺は家に帰ってしばらくぶらぶらしていた。美奈子是最優秀賞の騒ぎでしばらく先生達に話をされていたので、今日は一人で帰ってきた。親父今日は暇だったので、なんとなく俺は親父に将棋を挑んだ。ほほう、俺に一度も勝ったことが無い若造が、という感じで親父は不敵な笑みを見せた。

しかし、結果は、俺が大勝。

親父は信じられないというような顔をした。

「いや、京介……今の手、もう一度待ってくれないか……」

俺はあきれたように答えた。

「でも、親父、それ必須だぜ。どう動いたって負けるぞ」

親父はそこで考え込んでしまつて、動かなくなつてしまったので、俺は門の方に行つて坊さんの一人と話をしていた。

すると、門の外から、ひょこつと美奈子が出てきた。

「京くん、今ちよつといいかな……」

俺は縁側で固まつている親父を見た。別にすることもなかったのだ、美奈子についていった。

美奈子が俺を連れて行つたのは、寺の裏の坂だった。このなだらかな坂の上には、雑木林がある。よく子供の頃美奈子と一緒に遊んだ場所だ。

俺は何を言っているのかわからず、とりあえず祝辞を述べた。

「まあ、いまさらなんだけどおめでとうな、最優秀賞……」
沈黙。美奈子は何か思いつめたような顔だった。

俺はその間がなんだかいやで、話をしようとした。

「よく子供の頃遊んだよな、この坂で……」

美奈子はまだ考えている様子だった。

俺はもう会話を始めたくてしよつがなかつた。この沈黙は何かいやな兆しがした。

「ほら、美奈子、覚えてるか？　ここで遊んでいたら柏葉が来て二人で相撲をとっていたら転んで坂を転げ落ちて寺の葬式のだ真ん中に突っ込んだとき……」

しかし、美奈子は何も言わなかった。

俺は少し頭にきた。

「おい、美奈子、お前が話があるつて言っただろ？　話つて何なんだよ？　早く言えよ！」

美奈子はずらそうな顔をしたが、やっと口を開いた。

「私、高校は東京の美術専門高校に行くことになったの！」

沈黙。俺は今の言葉を飲み込むのに時間がかかった。

「え……？　東京つて……」

俺は情けない声で、美奈子の今のが冗談であつてほしいと願つた。だが、あの思いつめた顔では、事実なのだろう。

美奈子は続けた。

「賞を取ったからつて、全国の美術専門高校から誘いが来て……それで……私はもつと才能を伸ばすべきだつて先生達も……奨学金も期待できるから、東京の学校に行つて、腕を上げて自分で稼いで、それでお父さんやお母さんにも負担をかけたくないから……」

俺は沈黙した。

美奈子は言つた。

「それで……京くんとも……今年でお別れになっちゃうね、同じ高校に行けないね、つて……」

俺は言った。

「話ってそれだけか？」

美奈子は言った。

「それだけ……」

俺は坂をちよつと下り、美奈子に背を向けた。

「だったら行けよ、東京でもどこにでも……美奈子があんなにすごい才能を持っているのに、俺とした約束でそれを駄目にしてしまうのは間違ってる！」

「京くん……」

美奈子の声はどこか悲しそうであつた。

俺は声を平常にしようとして必死に頑張っていた。俺は言い切るように言った。

「だから、美奈子は美奈子の行きたいところに行つて、そこで才能を伸ばせばいい！ 自分の将来に向かつて進めばいい！ 俺のことなんか気にするな！」

少し沈黙の間があつた。

美奈子はやつとしゃべつた。

「……ありがとう……。京くんがそういつてくれるなら……」

俺は、美奈子の声も震えていることに気づいた。

美奈子はそのまま坂を反対側に、自分の家に向かつて下つていった。俺はその足音だけを聞いていた。何度か立ち止まる音も聞こえたが、やがて美奈子は去つた。その間、俺はずつと背を向けていた。零れ落ちる涙を見せないために。

その晩、俺はご飯も食べずに部屋にこもっていた。布団を頭からかぶり、布団の中で自分を責めていた。

男は泣いてはならない。俺は幼少の頃から親父にそう教わってきた。

別に好きだったわけでもない。いや、もしかしたら好きだったの

かもしれない。そもそも俺は『好き』という感情を勘違いしていたのかもしれない。『好き』というのは、憧れ混じった、立派な人に対して起こる感情であり、俺の学校にいる無数のストーカーのようにうつつとしがられても愛を誓う、それぐらいさせる熱い感情が『好き』だと思っていた。

ただ、俺にとって美奈子は、いつもそこにいてくれた人、いつも俺を支えてくれた人、いつも学校とかで助けてかばってくれた人だ。俺は馬鹿だ。俺は美奈子がそこにいることを当たり前のように思っていた。当たり前のはずがないのに。その美奈子がいなくなるというのは、今まで小さい頃からずっとあつた俺の心の支えを取り除くことだ。

小さい頃からそばにいて、支えてくれた。親のような人物だ。親も、失って初めて自分のおろかさに気づく親不孝者もいるという。

俺も美奈子を何度が助けた。しかし、美奈子がいたから俺は頑張れたのだ。美奈子のために喧嘩した。美奈子のために運動会をやった。美奈子は俺と親しいから、美奈子の評判を落とさないためにも、友のために、勉強も頑張った。

俺は、馬鹿だ。

当たり前のはずが無いのに。そこにいつまでもいてくれるなんて思っていた。

テレビで見るようなほろ苦い恋愛を、俺はいつも鼻で笑っていた。小説に出てくる甘い恋愛も、鼻で笑っていた。

そして、校内での恋愛話を聞くと、俺には一生無縁だと思っていた。

俺は臆病者だ。何もしないで、いつまでも美奈子がいてくれることを願っていた。何もしたくなかった。それによって隔たれることを恐れていたのだ。

ただそばにいただけで、そのまま何も変わらないでいてほしかった。

それこそ『好き』なんじゃないか。俺は勘違いをしていた。自分

の気持ちに気づこうともしなかった。ずっと一緒にいたい。それこそ、何万回も聞いてきた『好き』どころか『愛してる』の定義だったのではないか。

美奈子は俺のことをどう思っているのだろうか。そんなことを考えてみたこともなかった。

しかし、好きな割にはなんて情けない男なんだ。

運動以外はからつきし駄目の体力馬鹿。すぐに切れて暴力事件を起こす。

俺は何をしてるんだ………。

小さい頃からそばにいてくれた。だから自分の中にある感情に気づいても無かった。そして、いてくれることを当たり前にして何もしなかった。

美奈子は親じゃない。いままではずっとそばにいてくれた。ただ、親とは違って、これからもずっとそばにいたいんだ。

俺は………。

それから三日が経つ。俺は毎日、美奈子としゃべらずにいた。美奈子も俺を避けているようだった。俺達はもう一緒に帰らず、話すこともなかった。俺は自分の中で芽生えた感情を伝えることもなく日々をすごして行った。息苦しかった。

朝、学校に行くと、山門校長先生がインターホンに出る。相変わらず古いスピーカーから、聞きなれた声が雑音とともに聞こえてくる。

「今しがた、やっと期末テストのランキングが終了しました。手入力しているので時間が掛かったんですね。今から各学年のトップ、そして総合賞を発表します」

俺は、すぐに俺とは関係ない世界だな、と思って聞いているフリをして寝始めようとした。

「一年生の順位です。男子では、一位、大平山元、二位、新橋誠、三位、立花信夫です。女子は、一位、柏葉春子、二位、吉崎詩織、

三位、小川美知子です」

一番上の階で、歓声とともに誰かがこれを機に、と柏葉春子に大声でプロポーズしているのが聞こえた。その後聞こえた絶望の悲鳴から察すると、あっけなくふられたのだろう。

山門先生は続けた。

「二年生の順位です。男子では、一位、山伏隆信、二位、平尾誠一郎、三位、金平進一。女子は、一位、曾根浜子、二位、青崎美緒、そして三位、五十嵐理沙です」

すぐ上の階で、お互いを褒めるような言葉と、あと順位に届かなかったがり勉達の悲しそうな声が聞こえた。

「三年生の順位です。男子では、一位、柏葉光」

このとき、学校中の女子の歓声が聞こえた。耳が痛くなるほどであった。

「二位、石田三千夫、三位、油井克彦でした」

他の男子には歓声どころか祝う言葉さえおくらなかった。なんだか柏葉の人氣が罪に思えてきた。まあ、柏葉本人はお気楽だから罪悪感に苛まれることもないだろう。

「女子の順位です」

クラス中の女子が身構えた。このときのために何日もハードな勉強を続けた女子も多いのだろう。

「一位、黒木佐和子」

全員の目が黒木に行った。

柏葉が軽く言った。

「よっ、さっすが佐和子ちゃん！　今回もお見事！」

クラスの女子は悔しそうであった。黒木は大人びているため、柏葉にも無関心でこの褒め言葉も軽く受け止めたが、ああいう風の下の名前で呼ばれたい女子はたくさんいるのだろう。

「二位、瀬戸美奈子」

俺は瀬戸の方をチラッと見たが、あっちもこっちをちらっと見たようで、お互い目をそらした。

柏葉は言った。

「うーん、ここまでではいつもの不動の二人だね。さて、三位はいつも違う人がいるから、誰になるか……」

柏葉ファンは、見えないが他のクラスでも多分三位が自分でありまずようにと祈っているのだろう。

スピーカーから山門先生の声が響いた。

「三位、綾野鈴！」

綾野は信じられないほど驚いた。

柏葉はすぐ隣に座っていたので、綾野の肩に手を置いた。

「すごいじゃん、綾っち！　すごいねー！」

綾野は照れたように下を向いた。

俺はその他柏葉ファンの目にもすごい羨望と殺気が宿ったのを感じた。そりやそうだろう、柏葉も軽く女子の肩に手も置けないなんて大変な奴だ。まあ、その他の男子だったら『セクハラよ！』とか言われて殴られているだろうが。ちなみに、綾っちなんてあだ名がいつついたのか分からなかった。

山門先生は三年一組ではこんなドラマが展開しているのも知らず、淡々と続けた。

「それでは、総合を発表します」

一瞬、クラスのおしゃべりが止まった。そりやそうだろう、総合賞の受賞者には商品があるのだから。

「男子では、9教科900点中899点で、柏葉光が優秀賞を受賞です！」

みんなはうなずいた。まあ、それは妥当だろうな、という感じだった。男子は少しだけ悔しがっていたようだけど、そんな点数には届かないことも分かっていたらしい。

「女子では、9教科900点中890点で、黒木佐和子が優秀賞を受賞です！」

他の学年の一位受賞者の女子がものすごい勢いで落ち込んでいるのが感じられた。

俺はハツとした。いや、もういいんだ、どこの高校に行くかなんて。俺には関係ない。どうせ俺と親しい奴らは優秀だからどんどん高いところへと登っていく。柏葉だってどの高校もほうっておかない。黒木だって綾野だって、野球部主将の水戸だって、あの勉強会に参加した奴らはどんどん先に行くんだ。逆に考えれば俺は精一杯、あんなに頑張ってもトップ百で止まってしまふ。

山門校長先生は、スピーカー通して言った。

「なお、特別賞を含むこの三人には、『西久留米市立南部中学校教員旅行』への招待状が贈られます。教員の旅行にもう一人招待してついてくるのが出来ます」

さ、さすがケチな山門校長先生、教員旅行のついでに旅行をプレゼントするとは。団体割引で更に引いてもらおうという考えだな・・・。

とにかく、俺ははつとした。もう一人招待できるのか？ さんの、誰を招待すればいいんだ？ 俺はまた情けなく美奈子のほうをちらつと見た。でも、美奈子は黒木に誘われるだろうし。俺は迷った。頭の中を考えがぐるぐる巡った。そんなことをしてるうちに一日が過ぎた。

配られた招待券は、二人用であつた。なお、転売などは出来ないとのことや、いろいろ書いてあつた。

俺は寺の縁側に座りながら考えていた。

すると、親父がやってきた。

「聞いたぞ、京介。教員旅行に招待されたんだって？ 俺は嬉しいぞ、京介がそんな賞を取れるようになったなんて。頭は俺に似てからつき駄目だと思ってたからな。どうやら母ちゃんに似て頭はいらしい」

俺はため息をついた。

親父は続けた。

「それで、誰を招待するんだ？ 瀬戸の所のお嬢ちゃん、美奈子ちゃんか？」

俺は縁側からズルツとこけて落ちた。ズボンが砂だらけになった。
「何でもいつもそう安直にいうんだよ、親父は!？」

親父は急にカッコつけてハードボイルドに見せかけ、低い声で言った。

「京介……それは、お前と美奈子ちゃんを見てると、俺と母ちゃんの若い頃にそっくりだからだ」

俺は思った。なるほど、俺の恋愛下手はこのバカ親父の遺伝か。親父はそのはげ頭を怪しく光らせ、将棋盤と駒を取り出した。

「さて……京介……しみりした話はここまでにして、一局やろうじゃないか。名誉挽回してやる」

いつ名誉などあったのかわからなかった。俺は断った。

「いいよ、そんな気分じゃないし……」

親父はキョトンとした。

「京介……お前まさかふられたか？」

俺はまさか親父に見透かされるとは思わなかった。いや、あれはふられたんじゃない、と言ってもどう見たって俺がふられたのだらう。

俺が親父に言い返そうとすると、門から柏葉兄妹が入ってきた。

「おい、京介、ちよつと話がある……ちよつと来てくれな
いか？」

そついつて柏葉兄妹が俺を連れてきたのは、またあの坂である。

俺はちよつと思ひ出して泣きそうになった。

「何なんだ？ 話って」

と、俺は声だけでも正常に戻して言った。

柏葉は言った。

「いや、別にたいした問題じゃないんだけど、春子がちよつと……」

春子ちゃんは俺を見た。

「春子もみんなと一緒に教員旅行に行きたいの！ お願い京兄、連れてって！」

俺はびっくりした。びっくりしたついでに坂から足を滑らせて転んで坂の下まで落ちかけた。

「うおおおおおおお！」

幸い、俺は坂に生えていた丈夫な草につかまって止まった。

俺は言った。

「連れてくつたって、そんなの、柏葉、お前が連れていきやいいじやねーか！」

柏葉はちよつと俺に寄って小声で言った。

「いやいや、それがちよつとね、じゃお前他に誘うあてあるのか？」俺は美奈子のことを考えたが、首を振った。

「いや、いない」

柏葉は言った。

「なら話は早い！俺は別の人を誘って、上手くやるからさ！お前はとりあえず俺の妹を連れて行くってことにしとけよ、な！」

「いやでも………」

と、俺が言い始めると、柏葉妹が言った。

「お願い、京兄、春子も旅行を楽しみたいの！お兄ちゃんと一緒に旅行したいの！うちは貧乏だから旅行なんてめったにいけないし……お兄ちゃんは今もう高校行っちゃうし！」

柏葉は呆れて言った。

「いや、春子、お前そんなに俺のために行きたいんじゃないんで、単にあの勉強会のメンバーで楽しみたいだけだろ」

春子ちゃんは、バレた！というような顔をした。そして、またあの柏葉家特有の素敵笑顔をした。

「ねー、お願い！」

ぐわっ！デビルスマイル！普通の男子生徒ならイチコロだったろうが、俺は幸い何年も横で柏葉兄のデビルスマイルが女子のハートを射抜くところを見て来た免疫がある。しかし、断るわけにもいかない笑顔だ。柏葉家は結婚詐欺師でも充分稼げるだろう。

俺は長い沈黙のあと、やっと答えた。

「わーっ たよ、柏葉……」

柏葉は、明らかに喜んだ。

「よし！ サンキューな、京介！ これで面白いことになるぞ！」

俺は何が面白くなるのかわからなかったが、とりあえず二人を見送った。

寺に帰ると、親父が将棋版のそばでいびきかいて寝ていた。全くお気楽な親父だ。

毎日はどたばたしていて、あつという間に時は過ぎた。少年老い易く学成り難しとはよくいったものだ。俺は結局試験ではいい成績をとったものの、一学期全体から見ればあまり学ばなかったような気がする。絵の手伝いもあり、それ以前に結構無気力だったので、あまり学ばなかった。

終業式が来た。一学期も、思い起こせばいろんなことがあった。しかし、俺は今自分に何が出来たかを考えていた。美奈子とは一緒にいられない。想いも伝えてない。俺はどうすればいいのだ？ いつものように終業式は体育館で行われた。もう今頃になると、柏葉に無闇に喧嘩をふっかける奴もいなくなってきた。そりやそうだろう。柏葉に勝てるのは俺だけだ。しかも俺でさえ苦労するだろう。

「今から、終業式を始めます」

どう考えたって、それをいちいち告げる必要性はどこにもない。誰だってわかってるんだ。わざわざみんな体育館に集められたのは終業式のためで、今からそれが始まるということだ。

俺は考えた。一学期にどんなことがあったか。どんなことをしたか。どんなときをすごしたか。痒い言い方をすれば、どんな想い出を重ねたか。

俺は、なんとなく自分に怒りを感じた。もう、俺と俺の友達がぜったい一緒にいられる、最後の年なんだ。来年の春には、もう誰もがそれぞれの道へと進む。この一年は貴重なのだ。それがもう三分

の一もたいしたことがなく進んでしまった。こんなことを言うガラでもないが、物足りなかった。もっと楽しい思い出を作りたいかった。何故だろう、一年生や二年生の時は全くそんなことを考えもしなかったのに、三年生になったとたんそういう湿っぽいことを考えてしまふ。これが卒業を控えるということか。実感がわくに連れて辛くなる。あまりよくない気持ちだ。

「・・・これで終業式を終わります」

と、生徒会長がまじめに告げた。俺はいつ終業式が行われたのかわからなかったが、別に気にもならなかった。

ついに夏休みが始まったのだ！ 夏休みを迎えた久留米は、下級生にとっては遊びの場であり、恋の場でもある。秋にはもう受験勉強を始める俺達三年生にとっては、最後の中学生生活の夏休みである。ありふれた儀式のありふれた終了の号令とともに、夏休みの幕は開けられた。

第五話 八月

俺は、手の中にあるチケットをジッと見た。俺は一学期期末試験の特別賞受賞で、このチケットを手に入れた。そして、教員旅行にくつついて行ける。誰かもう一人を誘って。

しかし、その誰かは柏葉の推しによって柏葉妹に決まってしまう。おかげで夏休みが始まってから二週間経った今でも、俺の家にチケットを譲ってくれないかと言いに来る輩がいる。いいからお前は夏休みの宿題でもせつせとやってろ、って言いたいもんだ。あいつらがありなら俺はキリギリスだ。あいつらは高校も、その先の将来も行く宛てがある。しかし、俺は無い。だから、夏休みだろうが遊んでいて、あとは適当に親父にいいように進路を決められるだけだ。出家させられて高校生活三年はずっと修行、つても充分ありうる。しかし、それならこの一年だけは待つてほしい。せつかくみんながいる最後の年だ。最後まで楽しみたい。

俺はそんなことを縁側で考えていた。俺が勝って以来、親父は毎日将棋で俺に挑んでくる。だが、毎回負ける。子供の頃から仏教一筋で、将棋は始めての癖に、町内会とかで強いように振舞うからボロが出ないように本当に強くなりたらしいのだ。

俺は親父が十回目の『待つた』をして一生懸命考えている間、またチケットを見た。出発は八月四日。明後日だ。具体的には何も準備していない。草野先生によると、必要なものはほとんど無いらしい。財布と、着替えと、あと携帯電話とかカメラぐらい持つていけばいいと言っていた。機械音痴の親父を持つ俺の家に電子機器があるはずがない。どうやら俺は財布と着替えを持っていけば充分らしい。未だに畳を取り換えた時の出費が響いていて俺の財布はさびしいが。

その次の日も、親父が俺に挑戦し続け、負け続けていた。すると、昼ごろ俺の家に柏葉がやってきた。柏葉が来たのを理由にして将棋

をやめ、部屋に連れて行った。

俺は座布団を二つ出して座った。

「何だ柏葉。何かお知らせでもあるのか？」

柏葉はこの二週間も元気に陽気に遊んでいたのだろう。かなり日焼けしていた。おおかた、毎日女子に誘われて市民プールに行っていた、とかそんなもんだろう。

「さっすが京介。お見通しってわけか。明日の旅行、朝六時に駅前の広場に集合だつてさ」

俺はため息をついた。

「マジかよ、朝六時……夏休みでそんな時間に起きるのはラジオ体操やった小学生のとき以来だぜ。老人は起きるのが早いな」

「まあ、老人つて言っても山門先生、草野先生、そして竹内先生ぐらいだぜ。数学の林先生は四十ぐらいだし、体育の桂谷先生は三十台、そして赤崎先生に至っては二十代だ」

「あれっ？ 行くのはその六人だけか？」

「ああ、他の先生はやることがあるんだつてさ」

「なるほど……俺達は暇な先生共の暇つぶしに旅行に行くつてわけか」

「まあまあ、無料でいけるんだし、いいじゃんいいじゃん」

「じゃあ、明日、六時に駅前集合だな？」

「ああ。それじゃ、俺連絡係だから、じゃあな！」

柏葉はそういい残して去った。

縁側に行くと、親父はまた途中で居眠りしていた。お経の途中で居眠りしたりしないか心配だ。まあ、一応親父は仕事の時はビシツとしてくれるらしい。

それから数分すると、綾野が尋ねてきた。またずいぶんとおめかしをして、美しく魅せていた。

「あ、漆山君！ 柏葉君来なかった？」

「はーん、こいつも柏葉追っかけ隊か。俺は柏葉の去った方向を

指差して答えた。

「柏葉なら、もう次の家に行ったぜ」

「あ、じゃありがと！」

綾野はそついい残して柏葉の行った方角に急いで歩いていった。そんなに一緒にいたいかな。

俺はそう考えて沈黙した。．．．．．一緒にいたいことは別に悪くは無んじゃないか、引き止めてまでも一緒にいてもいいんじゃないか。そんな気持ちが頭をよぎったので、俺は取り払うように手を振って自分の部屋に戻った。

朝だ。小鳥が鳴いている。眠いな、昨日はワクワクして眠れなかったからな。小学生のようだ。今は何時だ？ 時計を見なければ．．．．．

「え？ 六時二十分？」

俺は飛び上がるように布団から起き上がった。そして、急いで服を着替えて、朝ごはんも食べずに廊下をだだだだつと走って、玄関で急いで靴を履いて、家を飛び出した。

「しまった！ 財布と着替えを忘れた！」

何故独り言を言っているのかはわからなかったが、俺は急いで家の中に戻り、部屋に戻って適当なかばんに服を適当にばばばつと入れた。そして、財布をつかんでかばんの中に放り込んで、そしてまた玄関に行って靴を履いた。そして、家を飛び出して学校までの長い坂を下り、学校の校門で左に曲がって、走って走って走って走りまくって、歩道橋を上って下りて、じれったい信号を待って、やっと駅前に着いた。

そこには誰もいなかった。しまった．．．．．！ 遅刻してしまったか！ せつかくの夏休みの楽しみを．．．．．！

「やつほー、京兄！」

と、聞きなれた声がすると、春子ちゃんが俺の背中を後ろから叩いた。

振り向くと、そのマクドナルドの中にみんながいた。俺はマクドナルドに入った。

「いや、しかしまた草野先生は自分で設定した集合時間に遅れますね」

と、若き国語教師赤崎先生は言った。

「まあ、とにかく漆山君が来てくれてよかったですね」と、数学の林先生が言った。

春子ちゃんは俺の背中をぺしつと叩いて言った。

「そーだ！ 京兄が来なければ、チケットがなくて春子も行けないところだったんだぞ！」

よかった、みんないる……。草野先生の遅刻のおかげで俺は助かったと思った。

俺はみんなが連れてきた人を見た。俺が招待したのは柏葉春子。柏葉は綾野を招待したみたいだった。綾野も招待されたときは死ぬほど嬉しかったに違いない。そして黒木が連れてきたのは……。

俺はぎよつとした。美奈子だ。黒木は美奈子を招待していた。美奈子は俺が見ているのを見て、ぷいっとなつちを向いた。

とりあえず俺は座れといわれた。柏葉は俺を、美奈子の対面席に座らせた。おいおい、やめてくれ……。俺は……。今はまともに美奈子と向き合えないんだ。そう言いたかったが、いえるはずも無いので、俺は黙って下を向いていた。

「あつ、漆山君、何そのかばん！」
と、黒木が言った。

俺は自分のかばんをみた。なんと、かばんのチャックが締め切っておらず、パンツが一つぶら下がっているではないか！

「ああっ！！ 何だこれ！ ははははは」

俺は慌てて隠してごまかすように笑った。ごまかせてなかったのはわかっていたが。

しかし、これを見て美奈子がちよつとクスツと笑った。俺はそれ

を見て少しほっとした。よかった。完全に嫌われたわけじゃなさそうだ。

先生がドリンクを買ってきてくれた。俺は丁寧に礼を言ってお飲み始めた。

すると、いつもの高級車がマクドナルドの前にいきなり止まった。あまりの急さに、俺は思わずドリンクにむせてしまった。高級車の中から、草野先生が出てきた。

山門校長先生は言った。

「草野先生！ 何でまた遅刻したんですか！」

草野先生は余裕の笑顔で言った。

「ふおっふおっふおっふおっふお。まあいいじゃないか。電車の始発もどうせ六時半まで来ないのであり、みんなもちよっと和むことが出来たようなので」

山門校長先生を始め、竹内先生や林先生、桂谷先生、赤崎先生はみなため息をついた。俺も先生だったらこんな人に仕切られたくはない。でも一応、自己主張する年配のベテランには誰も勝てないのだ。

俺達は荷物をまとめ、電車に乗った。電車で旅行って……交通まで安上がりな旅行だ。一応誰もが私服だったので、それほど目立ちはしなかった。

そして電車に揺られながら、途中で特急に乗り換え、特急の中で快適に過ごすこと六時間！ 途中で草野先生が乗り換える特急電車を間違え、鹿児島の方に行ってしまった。やっと俺達は目的の場所に着いた。別府である。なんと、今回の旅行は別府で温泉だったのだ！ 去年の『草野先生の手作り壺』とはずいぶん違う賞品である。もし試験で頑張れば結果的に柏葉兄妹と一緒に別府温泉に来れるなどということがわかったら、俺はおそらく特別賞を取れないぐらい、一学期の期末試験は白熱していたであろう。

俺達は特急から降りると、延々、山奥の宿まで歩かされた。泊まる旅館に着く頃にはもう日は暮れかけていた。

「やっとなつた」

と、綾野が口から漏らしていた。

旅館はオンボロであつた。誰もが『うわぁ……』というコメントをもらさずにはいられないほど。温泉の町・別府にこんなボロな旅館があつていいのかと思うほど、オンボロな旅館であつた。つるされた大きな看板には『草野温泉』と書いてあつた。俺達はみんな、いやな予感がした。

「何なんだ、この旅館……始めてみるのに嫌な予感が」と、柏葉は言つた。

俺達が着くと、中から何歳だか知れない老婆が出てきた。その老婆は草野先生を見るなり、草野先生に抱きついて言つた。

「源三！ よく来たね！」

と、その老婆は言つた。

誰もがあつけに取られているのを見て、草野先生は言つた。

「ふおつふおつふお。この人は私の姉ですよ」

「ええええええええええ！」

誰もが驚いた。長い間知られていなかった草野先生の本名が草野源三であること以上に驚きを受けた。何故草野先生の家族が別府で温泉をやっているのか、それは誰もわからなかつた。

「さあ、さあ、中に入って」

女将さん（であろう草野先生の姉）が俺達を部屋まで案内してくれた。

部屋は、和風で、古風で、ついでに隙間風であつた。俺達生徒のために二部屋あつた。『玄武の間』と『朱雀の間』だ。ちなみに先生達は『虎の間』と『龍の間』。男である以上柏葉と俺は玄武の部屋に入れられ、女子は朱雀の間で楽しく遊んでいた。

「なあ……」

と、柏葉は俺に言つた。

「ん？ 何だ？」

と、俺は返答した。

「温泉に入るか？」

「・・・・・・ああ。入る」

「じゃ、行こうぜ・・・・・・」

しかし、どちらも動かなかった。俺も柏葉も疲れていたのだ。しかし、一応温泉には入ることにした。

俺達が浴衣片手に部屋を出ると、ちょうど女子も部屋から出てきた。手には浴衣を持っていた。そして、その他シャンプーやリンス、ボディーウオッシュ、ヘアトリートメントまで。家からもってきたのだろうか。

「あ、お兄ちゃんと京兄もお風呂に入るの？」

と、春子ちゃんがひよこつとみんなの後ろから顔を出して言った。

柏葉は答えた。

「ああ、俺も京介もな」

春子ちゃんは言った。

「のぞかないでよ」

柏葉は言った。

「ばーか、誰が春子のお風呂なんて覗くか」

俺は思った。多分、うちの中学校にならそういう、春子ちゃんのお風呂を覗きたがつてる春子ちゃんファンの変態男子はたくさんいると思った。

俺達はみんなでそろそろお風呂のところまで行った。そして『男湯』『女湯』に別れた。

脱衣室の中で着替えながら、柏葉は言った。

「いや、信用できる人ただだけできて、よかったよ。修学旅行とかだと俺は逆に覗かれたことがあるからな」

確かに。世の中でも覗くのではなく覗かれる男子は少ないだろうが、柏葉は紛れもなく覗かれるほうだ。うちの学校は全ての学年が毎年それぞれ違うところに行くのだが、去年の修学旅行では柏葉が風呂に入ると、垣根の裏に女子がたくさん隠れているのが見つかった。それまで女子を覗く男子にだけ注意を向けていた先生達にとっ

て、女子の中にだって熱狂的な追っかけファン（覗き魔、ストーカ―）がいることが判明した修学旅行であった。

覗きの話はとりあえず置いて。オンボロの旅館の割には、とてもいい温泉であった。なるほど、それで潰れないのか、この旅館は。白い湯や、透き通った湯があつて、どうい風に作っているのか、青い湯まであつた。今日この旅館には客が少なく、俺と柏葉は貸しきり状態で楽しめることが出来た。

「漆山選手、行きます！ 25メートルフリースタイル！」

と言つて、俺は一番大きい温泉を端から端まで泳いだ。マナー違反だが、誰もいないんだ、それぐらいはいいだろう。

「ざっぱーん！ 漆山選手、今ゴールしました！ 不可能だといわれていた記録が破られ、今歴史に新しい名前が刻み込まれます！」と、柏葉は言つた。

俺達は笑つた。子供の頃にかえつたようだった。

すると、急に四人の男子が入ってきた。俺達は風呂の奥にいて、風呂からの湯煙でよく見えなかったが、影からして一人はデブで、一人は筋肉質で、一人はアフロであつた。そいつらはしゃべつていた。

筋肉質が言つた。

「おい、寛ちゃん、本当にこの旅館でよかったのかよ？」

その寛ちゃんは答えた。

「ばーか、お前もさつき見ただろ？ むちゃくちゃ可愛い女子がこころへんを歩いていったの」

アフロは言つた。

「だからって寛ちゃん、この旅館に入つて何が出来るんだ？」
寛ちゃんは答えた。

「言つただろ？ 俺が以前ここに旅行で来たとき、この風呂場から、女子風呂をのぞける穴を見つけたんだよ……」
筋肉質は言つた。

「まじかよ！ 早く見せろよ！」

俺と柏葉はお互いを見て、うなずいた。

「黙って妹を覗かせるかってんだ……友達もだ」と、柏葉は珍しく本気で言った。

俺だつて、あんな変な奴らに黙って友達を覗かれるのは嫌だ。

俺達はそーっと、あいつらが気をとられて壁のヒビを探している間、あいつらの近くまで温泉を移動していった。

俺と柏葉は、一、二の三で、風呂場から勢い良く飛び出た。水しぶきで三人が振り向く時にはもう遅かった。

「うおおりゃああああ！」

俺達は左右のアフロと筋肉質は取り押さえ、そいつらは頭を打って気絶したが、寛ちゃんという奴は脱衣所の方に逃げた。

「追うぞ柏葉！」

「おう！」

俺と柏葉はそいつを追った。そいつは脱衣所の出口の方でズボンをはいていたが、俺達は裸のままそいつにタックルした。勢い余ってそのまま脱衣所の外に出て、廊下に倒れこんだ。

「よっしゃー！」

俺がそう言つて顔を上げると、なんとそこには女子が。

そりゃそうだよなあ……あんなに長く遊んでいたんだから女子が出てきてもおかしくないよなあ……

「な……何やってんの？」

と、一番冷静な黒木が聞いた。

俺と柏葉はなんていっていいのか分からなかった。とりあえず柏葉は、

「よっ、どうだった？ 風呂」

と聞いた。しかし美奈子、綾野に春子ちゃんは固まったままであった。俺達はそーっとそのまま立ち上がりずにバックして脱衣所の中に戻った。ちなみにその寛ちゃんはズボンをはく途中にタックルされたので、半ケツのまま廊下にしばらく倒れていた。せめて俺達がタックルをしたあとと仰向けに倒れなかっただけ、ありがたい。

俺達は服を着て、『龍の間』（女性教員の部屋）に集まった女子や先生みんなにことを説明した。

「で、それで覗こうとしていたから俺と柏葉はそいつらを倒して、一人が逃げたんでそいつも取り押さえたんですよ」

と、俺は言い終えた。

山門校長先生は言った。

「なるほど、それはよくやってくれましたね。手柄ですよ」

数学の林先生はどこから取り出したのか、竹刀をびしっと畳に叩き付けた。

「覗きなど言語道断！ 赤の他人じゃなければ、この林鉄蔵が叩き切ってやる所！」

国語の赤崎先生は言った。

「しかし、先生達、気絶してる男子達は、今隣の『虎の間』に寝せてあるんですけど、どうも一人、見たことがあるんですよ」

体育の桂谷先生は言った。

「そうですね。私はさっき気づきました。なぜか顔たちがすこし違いますけど、でもあれはうちの学年の瀧澤寛一です」

俺と柏葉、それに女子達は驚いた。まさか二年生の瀧澤が俺達の旅行と同じ時に来ていたなんて、なんと偶然！ いや、単なるストーリーか？

他の二人の男子は、近所の高校に通う一年生であり、インターネッツでうちの中学校の女子のファンクラブに入っていたらしい。瀧澤はそいつらの協力を得てここに来たらしい。

瀧澤はそのまま父親の所に返された（強制送還？）。またの不祥事で、今度は瀧澤をどんな地獄が待ち受けているのだろうかと思うと、背筋が凍った。

そんなこんなで、温泉の騒動はおさまった。

俺達は全員食堂に呼ばれた。すると、食堂のテーブルには、なんと豪華絢爛な、明らかにこの旅館には不似合いなご馳走の数々が並

べてあつたのである！ 刺身に寿司、馬刺しに焼肉……しやぶしやぶもあつて、茶碗蒸しや高級おひたし、その他郷土料理や定番の料理がたくさんあつた。

女将さんはふんと鼻で息をした。

「近所の旅館で、作つて余つちやつた物も足したよ。中学生といえば、育ち盛り。これぐらいは食べるでしょ」

俺達は喜んでがつついて食べた。俺達是一日の疲れもあつて、あつという間にご馳走を平らげた。

三十分後、食堂には、満腹で動けない集団がいた。なんとも情けない姿であろうか。女子は『太らないため、控えてる』などといっていたが、それにしてはすいぶんと食べていた。先生達もその情けない姿を堂々とさらしていた。

「うゝん、うゝん」

みんなが苦しむ声しか聞こえなかった。

そして、みんなやがて自分の寝室に戻る。俺は寝ようとしたが、何しろオンボロ旅館で隙間風が入る。そして、壁も薄いから隣の部屋の音が聞こえる。女子達の音だ。中学生らしく、さまざまな話題に花を咲かせている。柏葉妹と、黒木と、綾野の声がする。美奈子はまだ眠つたのだろうか。俺は寝れないので、散歩にでも行こうと思つた。

「おゝい、京介ゝお前どこに行くんだゝ？」

と、俺が部屋を出ようとすると、だるそうな柏葉が俺に聞いた。

俺は振り返つて答えた。

「いや、ちよつと眠れねーから散歩にでも行こうかと……」
「ふゝん。先生達に許可はもらったのか？」

俺は鼻で笑つた。

「先生達なら、見ただろ、酒が入って一人残らずベロンベロンに酔つてるさ。今は部屋でゴゝゴゝいびきかいて眠つてるだろ」
「なるほど、そうか……じゃゝそのうち帰れよゝ」

と言って、柏葉はボタンと布団の上に倒れた。

俺はそろりそろりと廊下を通り抜け、玄関から靴を履いて外に出た。外の夜風は気持ちよかった。山奥で町の中心から離れていてもさすが温泉町、別府。こんなに暗くなってもどこからかほのかにいいにおいがする。食べ物の香りだろうか？

俺はもう一度旅館の名前と、あと通りの名前を確認した。それが分からなくては迷子になってしまう。俺はゆっくりと坂道を下り始めた。

おかしい。迷ってしまった。ここはどこだろう？ 地元の人にさえ会えれば、「草野旅館」への道順を聞けるのだが……。地元の人さえ見当たらない。やはりさっき曲がった道がだめだったか？ それともその前か？ もう自分が何の道にいて、さっきどう曲がったかさえわからなかった。

俺は一生懸命探した。何度もいろんな道を行って、やっと人に会うことが出来た！

その人は、いかにも温泉町の旅館を営んでそうな優しそうなひとだった。

「あ、あの……。『草野旅館』ってどこですか？」

と、俺が聞くと、その人はとても親切に分かりやすく、道を教えてくれた。俺は丁寧に礼を言っ、道順をたどり始めた。

すると、道に人だかりがあるではないか。誰かを囲んでいるようだった。みんな旅館の浴衣を着て鉢巻をしていたり、商売の半纏を着ていたり、地元のひとのようだった。

「けど、自分の泊まってる旅館がわからねえにはどうしようもないよなあ」

と、立派な旅館の従業員、らしき若い男が言った。

「電話をしてもこの子の学校は夏休みで誰もいないし親もいないらしいのう」

と、何か夜店を営んでそうな老人が言った。

俺はなんだろうと思った。

「何ですか？ 何かあったんですか？」

若い男は答えた。

「いや、この子が迷子になっちゃってよ、それでどうにも連絡がとれないんだ」

俺は人だかりの中心でしゃがんでいる子を見た。

美奈子ではないか！

「美奈子！」

俺がそういうと、美奈子は顔を上げた。

「京くん！」

若い男は言った。

「何だ、アンタの知り合いか！ ならよかった。この子を連れて帰れるな？」

俺はうなずいた。人だかりはよかった、よかったといった感じで解散した。

俺と美奈子は旅館に続く夜道を歩き始めた。

美奈子は言った。

「ありがと……また助けてもらっちゃったね」

「いや、別にこれぐらい……」

「京くん、昔からよく私のこと助けてくれてたよね」

「ん？ そうか？」

「私よく運動が出来なくていじめられてて、それで京くんがかばってくれたり、野良犬からも守ってくれたよね……」

「ああ、あれか……」

と、俺は遠い目で見た。ずいぶん昔のことだ。よく覚えていたなと感心する。あの時は近所の市会議員の息子の犬だったから、親父にいろいろ迷惑をかけたんだよね……。

美奈子は続けた。

「いつも、私が困ってるときは助けてくれたよね、京くんは」

「・・・・・・・・まあ、別にいいんだけどよ、長い付き合いだから」
しばらく沈黙が続いた。鈴虫の音と、どこかでふくろうがホーホー
ー鳴いているのが聞こえた。

美奈子が先にしゃべった。

「春になったらはなればなれになって、もう助けてもらえないのか
あ・・・・・・・・」

美奈子の声は震えていた。俺はそれに気づいた。でも、何もいえ
なかった。少し涙ぐんできた。

「本当に、今までずっと、ずっと・・・・・・・・」

美奈子は言葉が出ないようだった。

その次に来る言葉はわかっていたので、俺は急に美奈子の肩をつ
かんで、じっと目を見た。

美奈子は驚いた。

「な・・・・・・・・何？ 京くんどうした？」

俺は息を深く吸い込んでから言った。

「ありがとうなんていうなよ・・・・・・・・」

美奈子は涙ぐみながら言った。

「え？ 何のこと・・・・・・・・」

「分かっているさ、俺がいつまでもいたら、美奈子の夢の邪魔になる
って・・・・・・・・だからって！ そんな、今まで『ありがとう』み
たいな、縁を切るようなこと言うなよ！」

美奈子は沈黙して、目をそらしていた。くちびるを少し噛んでい
た。辛そうな顔をしていた。

俺は構わず続けた。

「春になったら確かにお別れさ・・・・・・・・俺は美奈子のように、
東京行つて勉強するなんて立派なことは出来ねえ・・・・・・・・だけ
だよ！ 春までは一緒なんだぜ！ それまでは・・・・・・・・それま
では・・・・・・・・」

俺は言葉が詰まったので、一度下を向いて目を閉じて、少しでも出
続ける涙を振り切ろうとした。でも、無駄だった。

俺は最後に言った。

「それまでは、．．．．．一緒に．．．いさせてくれよ！俺は．．．俺は．．．．．。．．．俺は、お前のことが．．．．．好きなんだよ！」

俺は美奈子にさつと顔を近づけ、唇を重ねた。そんな立派なものじゃない。今まで恋のこの字も知らなかった奴が、初めてしたキスだ。俺はもう涙ぼろぼろだった。

涙はやむことなく、俺の顔から流れて浴衣の上に落ちた。わずかな街灯で照らされてる美奈子の顔も、涙が流れ落ちていた。

俺は強く握りすぎていた美奈子の肩を離れた。美奈子はうつむいていたが、泣いているのが見えた。俺は耐えられなくなり、背を向けた。

突然、美奈子が後ろから俺を抱きしめた。美奈子は俺の背中を涙をぬぐうようにして顔をこすり付けた。それでも涙は止まらないようすだった。

「私．．．．．ずっと待ってたんだ．．．．．その言葉を．．．．．いつか京くんが言ってくれるのを待って．．．．．。．．．．ごめんね、臆病で自分から言えなくて．．．．．」

俺は振り向いて美奈子を強く抱きしめた。俺の目からも、涙があふれ出ていた。

「バカヤロウ．．．．．気づくのになんにかかったじゃねえか！．．．．．美奈子なら知ってるだろ？俺は．．．．．俺は不器用なんだよ！だから．．．．．こんな風にしか伝えられなくて．．．．．」

美奈子は首をかすかに振った。

「うつん、私は．．．．．すごく満足．．．．．」

俺と美奈子はそのままお互いを抱きしめていた。暗い山道で、薄暗い街頭が静かに二人を照らしていた。鈴虫が鳴いていた。俺達も泣いていた。

遠くで柏葉の声が聞こえた。

「おい！ うるしーやーまーきょーうすけー君！ 迷子の迷子の京介やーい！」

俺と美奈子はお互いを見てパツと離れた。急にものすごく恥ずかしくなったのは何故だろう。俺は顔が猛烈に赤くなっていくのが感じられた。

美奈子は俺に顔を向けていなかった。同様に赤くなっているのであらう。

柏葉が現れた。

「おっ！ 瀬戸ちゃん見つけてたのか、京介！ 実は瀬戸ちゃん、散歩に行ったつきり帰ってこなかったらしくてさ。そしたら京介も帰ってこないから、先生たちまで心配して見に来てるぞ！ あっちだ！」

俺達は柏葉に先導されてみんなのもとへと戻った。俺達二人は先生達にこっぴどく説教された後、部屋に戻された。もう絶対に無断外出はなしで、俺と美奈子は自由時間も監視役の先生に付きまといられることになった。

柏葉は俺に、いいことあるさ、などと慰めていたけれど、俺にしてみればもう充分、最高の旅行だった。

そしてあつという間に数日が過ぎて、俺達の温泉旅行は終わった。最後の日、別府の駅のプラットホームに電車が滑り込むように来ると、俺はなんだかこの町に別れを告げるのがさびしくなった。でも、この町での思い出は大切だけど、やっぱり俺は、今までずっといて大切な人たちに出会い、これからもずっといるであろう久留米が恋しかった。この町には温泉もレジャーも何でもある。でも、俺には思い出がたくさん宿り、みんなと一緒に思い出を重ねることが出来る場所、俺の生まれ育った久留米が好きだ。

電車のドアがぷしゅーと音を上げながら開いた。俺はもう一度空を見上げ、この町に感謝をした。

電車のドアは閉まり、ゆっくりと、俺の町へと走り出した。

第五話 八月（後書き）

えー、どーも。最後まで読んでくれてありがとうございます。これも友達とやった小説で、お題は「恋愛」で、辞書から拾ったキーワードは「不世出」「出家」「久留米」の三つでした。書いてて割と楽しかったです。アドバイスとか感想、注意点とかあったらどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6957e/>

久留米・ラブ・ストーリー

2010年10月8日15時52分発行